

# 戦前における友松圓諦の真理運動

——高嶋米峰、松下幸之助との連関と共に

坂本慎一

## 序

友松圓諦（一八九五～一九七三）は、戦前から戦後にかけて活躍した仏教学者であり、仏教啓蒙家である。圓諦は昭和九（一九三四）年にラジオで「法句経講義」を放送して爆発的な人気を呼び、真理運動を興した。高嶋米峰らの新仏教運動を継承したこの運動（後述）は、東京と大阪を中心に全国へ波及し、正会員（同信）だけで二万五千人以上を集めた。「真理運動」の名は、当時において広く知られていたと言っている。

松下幸之助は、敗戦によって荒廃した日本を見て、繁栄を通じた平和と幸福を目指すP H P運動を興した。幸之助は、昭和二三（一九四八）年二月一日、大阪市立愛珠幼稚園において開かれた「P H P講話及座談会」で、次のように言っている。

信という言葉はやはり一つの信心を持たねばいけない訳です。P H Pに対する一つの信仰を持つと言うことですね。解という言葉は、真理を究めるといふか、理解を持って行くということですね。

何でも両心で行くと言うことは、P H Pをやったり大衆は、P H P運動はいいのだ、P H P運動をやれば、必ずよくなって来るんだ、あれは真理運動だと言うことだけを頭に入れて行く訳ですね。

幸之助は、ここで「真理運動」と述べている。幸之助がどの程度詳しく真理運動について知っていたのか定かではないが、「真理運動」と言っていることは注目すべきである。また、同年の一〇月二三日、P H P定例研究講座「教育の大本」と題する講話の質疑応答で次のように言っている。

松下 P H P運動とは宗教運動であるか。違う。それでは精神作興運動か。違う。社会運動か。違う。それじゃなんだ、という、その全部を包含したものだ。P H P運動は全部を包含しているんだ、だからいわば宗教運動とも言えるし……

問 P H Pは真理運動と理解してますが。  
松下 それだけじゃなく、また精神運動ともいえる。そうして社会運動とも言える。そうして宗教や精神運動や、社会運動だ

「けか」といって、決してそうではない。要するにそこに現実的性格を十分に盛ってくるのである。現実的性格をはつきりとつかむのである。精神運動でも、社会運動でもなんでもない。また宗教運動でもない。要するに、お互いの生活、生々しい教育、生活をはつきりつかんだ、いわゆる明日のパンをおいしく食べるという運動です。<sup>(2)</sup>

幸之助は、ここではPH P運動とは真理運動を含み、それだけではなく社会運動などさまざまな側面を含むものであると説明している。幸之助は真理運動を継承しつつも、さらに何らかの形で一段上の運動を目指していたようである。

幸之助によるこれらの発言から、次のことが分かる。第一にどうやら幸之助は真理運動について知っていたようであり、これとPH P運動との連関を示唆している。第二に、質疑応答にもあるように、当時の人の中にはPH P運動と真理運動が似ていると感じた人もいたことである。<sup>(3)</sup>

真理運動を主導した圓諦自身は、「私の読書履歴」という文章で、次のように言っている。

松下幸之助さんの『なぜ』という本などは、ちよつと私の申すのと同じような主張ですけれども、やっぱりいい本だなあと読んで読んでおります。<sup>(4)</sup>

『なぜ』は昭和四〇（一九六五）年に出版された幸之助の本であり、政治や道徳についてさまざまに論じている。圓諦は、幸之助の主張が自分の主張とよく似ていることに気がついていたようである。圓諦は初期の『PH P』誌に何度か寄稿しており、PH P研究所とも交流があった。<sup>(5)</sup>

圓諦に関する今日までの先行研究は、その社会的影響力に比べると非常に少ない。<sup>(6)</sup> 最も詳しい著作は、圓諦の息子であった友松諦道と娘であった山本幸世の共編による『人の生をうくるは難く 友松圓諦小伝』（真理運動本部、一九七五年）と、山本幸世による『友松圓諦日記抄 道をききてこころやすらかなり』（真理舎、一九八九年）である。両書とも、圓諦の事蹟については詳しいが、真理運動の詳細についてはまだ研究の余地を残していると言つて良い。

本稿では、分析対象とする時代を戦前に限り、PH P運動に似ているとされた真理運動がどのようなものであったのかを探りたい。特に真理運動のリーダーであった友松圓諦について、その思想と事蹟を明らかにする。また真理運動がその精神を引き継いだとしている新仏教運動と、幸之助によるPH P運動との比較も試みたい。さらに圓諦による戦争肯定についても分析し、幸之助が真理運動とよく似た運動を興しながらも真理運動自体には参加しなかった理由を推測したい。

（以下、雑誌『真理』からの引用は、昭和二〇年五月号一二頁を「真理S一〇—五—一二」と記す）

## I 真理運動までの友松圓諦

### 1 友松圓諦の前半生

友松圓諦は明治二八（一八九五）年四月一日、名古屋市中区矢場町若宮裏、現在の若宮八幡社の付近で生れた。父の勝次郎について圓諦は「米穀小売商と精米工場とをかねてゐた」（真理S二二七―二二）と述べ、父は「神々に商売に上手で、一代に相当に産をなした人」としている。生家の宗派は浄土真宗東本願寺派であった。圓諦は、明治三七（一九〇四）年二月一三日、満九歳で叔父が経営する浄土宗の安民寺に跡継ぎとして養子に出された。寺の場所は当時の住所で東京市深川区三好町三一であり、余り裕福な寺ではなかったようである。

その後は、寺での生活が不満で、中学のころから「仏教改革」（真理S一一五―二）を志したと証言している。また、寺を出ようと医者を目指し、一高を受験して落第したとも言っている。宗教大学（現・大正大学）に入学の後、在学中に足かけ二年に渡って近衛歩兵第二連隊へ入隊した。後の圓諦は、「仏教の狙ふところ」は「軍隊の狙ふところ」と同じだと述べている。宗教大学では、特に渡邊海旭から教えを受けることが多かった（後述）。宗教大学卒業後は、慶應義塾大学文学部史学科で学び、歴史学の田中萃一郎、日本経済思想史の瀧本誠一に師事した。慶応では「五ヶ年」に渡って学び、「卒業するとき四人のうちの三番というすばらしい成績であった」と言っている。

卒業後はそのまま慶応で教鞭をとっていたが（真理S一一一―五―五）、昭和二（一九二七）年に渡欧した。費用は幼少時代からのパトロンであった、実業家の藤井栄三郎などが負担したようである。留学の目的は、マックス・ヴェーバーの研究であった。ハイデルベルク大学では、マックス・ワレーザー教授（不詳）に特に師事しており、隣の家に住んでいたと証言している。その他、同大学では、カール・ヤスパースやカール・マンハイムにも教えを受けた。その後フランスへ渡り、シルヴァン・レヴィに会ったことで、明治時代の日本の仏教を研究しようと志した（後述）。圓諦は昭和六（一九三一）年四月に帰国し、以後研究に励んだ。

### 2 研究者としての友松圓諦―瀧本誠一門下として―

友松圓諦は、最初の本格的な研究書となる『仏教経済思想研究 第一巻』の自序で、次のように自らの学問を振り返っている。

慶應義塾の史学科に籍を置くや、故田中萃一郎博士と渡邊海旭ドクトルとは三ヶ年間に、東照宮三百年記念奨学金の補助を斡旋して僕のこの研究を鞭撻せられた。研究漸くならんとして忽ち大正十二年、震災の厄難に遭ひ文献資料悉く烏有に帰し辛じて身を以て免かるゝを得た。田中博士も又是に先んずる二句にして突然他界せられ、内外のこの不幸は僕の研究に致命的の打撃を与へた。爾後今日に至る十年に近からんとして誠に僕の怠慢と貧窮とが瀧本誠一博士の倦まざる指導を有ちながら常に研究に集注することを

許さなかったのは故田中博士に対しても誠に慚愧に堪へないところである。幸に、昭和二年秋、内外の援助により留学の好機を恵まれたので、滞欧三ヶ年半、僕の念願はたゞの学的債務を少しでもはたしたいことであつた。<sup>17)</sup>

圓諦は、当時亡くなつたばかりの田中萃一郎と、渡邊海旭、瀧本誠一を師事した先生としている。このうち経済思想家は瀧本だけであるが、瀧本について圓諦は他の著作の中でも敬意を払いながらしばしば言及している。<sup>18)</sup>

瀧本誠一は安政四（一八五七）年に江戸麻布龍土町の宇和島藩邸で同藩藩士の子として生れた。<sup>19)</sup> 学校教員や朝日新聞記者を経て、明治二五（一八九二）年頃から経済学を独学で勉強し始めたようである。慶應義塾で教鞭をとるようになったのは大正八（一九一九）年であつた。瀧本の学問について小室正紀は、「良い意味でのディレッタンテイズムあるいはアマチュアリズムとも呼べる広い関心と知識が基礎にある」とし、「ディレッタンテイズムを一方で持ちながら、晩年のライフワークとなつていった仕事事が、日本経済思想史や経済史に関する史料集の編纂という、極めてアカデミックな作業であつた」としている。

『経済一家言』で瀧本は、経済学の一部が「数学、幾何学若くは理化学の如き外見を得せしめたる」ことは「浅学俗儒の徒を歎ばしむるに足るべし」と雖も、是れ実に斯学を殺したるもの」と主張する。<sup>20)</sup> 経済学の数学化の原因を作つたアダム・スミスに対しては、「アダム・スミスの罪人たるに止まらず兼て又学問界の大罪人と為さざる可らざる

なり」と厳しく批判している。

瀧本が推奨したのは儒学的な経世済民の思想であつた。瀧本は「儒者の解釈は或る制限の下に概ね最近の学説即ち之れを以て社会に於ける人間の経済的行為を支配する現象を講究する所の学問とするの意見に符合するものありと信ずるなり」と述べる。<sup>21)</sup> 儒学的な経世済民思想は、「今日に謂ふ新らしい思想に近い」としている。この「新らしい思想」が何を意味しているのかは分からないが、これが儒教的な経世済民思想に似ていると解釈しているのである。『日本法制経済史』の序文では次のように言っている。

経済学は経世の学である。経世済民の学である。夫れでヨーロッパにおいては経世済民の学をアダムスミスが唱へたが、マンチェスタースクールなどで説くやうになり、卑しい錢金の勘定の学の様になつた。眞の経済学はそんなものではない。<sup>22)</sup>

瀧本は「卑しい錢金の勘定の学」となつた当時の欧米の経済学に対し、批判的であつた。

圓諦は、こうした瀧本の思想を明白に相続している。まず、圓諦は「私は福沢先生の教へを受けて居る一人であります」と述べているように、自身が慶応の出身であることに強い誇りを持っていた。そのうえで「現代の欧米経済学説といふものは、目に見える、直ちに勘定出来るだけの原因しか考へてゐない、非常に貧弱なる因果論だけだ」と述べている。また『真理』でも次のように言っている。

今日では西洋の経済学のために、賃金がさきさまにきまって、労働時間がきまって、そこから労働者が出来る様に思ふと大間違ひです。時間には労働賃金の基礎は出て来ない。現代人は非科学的な西洋の経済的思想に迷はされてゐる。人間は働くこと、はたのお役に立つこと、これから値段がきまるのです。(真理S 一一—五—一 四二)

圓諦はしばしば厳しく欧米の経済学を批判し、自らが信じる仏教的な経済思想を主張する。彼が思いきって欧米の経済学説を批判できたのは、やはり恩師であった瀧本がこれを厳しく批判していたからであろう。この態度は後に述べるように、松下幸之助にも相通ずると考えて良い。

### 3 新仏教との出会いとその位置づけ

友松圓諦は、新仏教徒同志会の思想との出会いについて、大正元(一九一二年)の義兄の死がきっかけであったと回想している。義兄が新仏教など近代仏教思想関連の書を多く残して死去したため、それらの蔵書が当時学生であった圓諦のものとなった。義兄の蔵書は、若き圓諦の関心を新仏教へ引きつけるのに充分であった。

そもそも古代インドの仏教を研究しようとして欧州へ留学した圓諦が、明治時代の日本の仏教思想に興味を持ったきっかけは、フランスにおけるシルヴァン・レヴィの示唆によるものである。レヴィは圓諦

に「わざわざインドの古代の勉強をしているけれども、そんなものは、充分資料はないんだ」と述べ、日本に「帰ったら、明治関係の仏教資料を集めてみたらどうか」と示唆したという。圓諦は「ヨーロッパに行きますといふと、かへって日本がわかります」(真理S 一〇—九—一三八)と述べており、レヴィの示唆は当時の圓諦にとって共感するものだったようである。

直接会った人物としては、先の引用にもあった通り、圓諦は新仏教徒同志会メンバーの渡邊海旭(一八七二—一九三三)から大きな影響を受けた。海旭について高嶋米峰は、雑誌『新仏教』発刊のころ多額の寄付をしてくれたと証言している。海旭は一〇年間ドイツへ留学(一九〇〇—一〇)し、帰国後は宗教大学や東洋大学で教授をしながら、東西仏教の橋渡しの役割を果たした。海旭は、大乘仏教の精神に基づいた社会事業を起こしたり、「新戒律主義」を提唱するなど、多彩な活躍をした仏教者であった。

また、圓諦は新仏教運動のリーダー格であった米峰とも懇意であった。圓諦によれば「個人的に懇意にさせて頂いたのは聖徳太子の鑽仰運動を通じてからのことであつた」という。米峰の死後、圓諦は次のように述べている。

先生の話風警告には、その声、その語調に、独特のものがあつた。何の気なしにラジオから流れてくる声にも、「高嶋先生だな」と気づくほどであつた。たしか、終戦直後だつたと思ふが、当時、長野の疎開先きでラジオ講演をうかづたときほど、感銘ふかく

感じたことはなかった。少しばかりこの方面には興味をもってゐたので、永田青嵐、下村海南のお二人と共に、いつもききもらすまいと注意して伺ったものだ。とりわけ先生の話風にはいつも「警世の声調」があった。<sup>31)</sup>

圓諦は、米峰と個人的に懇意にしていたのみならず、ラジオ講演の「話風」にも強い関心があった。実際に会った回数は限られているであろうから、ラジオ講演から米峰の思想を摂取した部分も大きかったのではないか。

このようにさまざまな経路から圓諦は新仏教の影響を受けた。真理運動の初期において、圓諦は次のように述べている。

「全日本真理運動」の登録せる同信、一万四千有余名について見るに、専門の仏教々役者はその一割にも及んでゐない。……真理実践の運動は今や、町に村に、学校に工場に、商店に官衙かんがに、男性に女性にあらゆる方面に向つて根づよい歩みをつゞけてゐる所以だと思ふ。あの明治仏教史に華やかな色彩あるページをつゞらせてゐる「新仏教徒」の運動がやはりその半数に近い同信を在俗者の間にもつてゐたことは誠になつかしいことである。今や、当時の血気青年は一部の者を除いては、或は鬼籍に入り或は平和なる晩年をたのしんでゐられる。私達は彼らの念願をうけついで、これを現代的形態の上に実践しようとしてゐる。(真理S一〇一七―二―三)

真理運動は新仏教運動を意図的に「うけついで」いたものであった。言わば「昭和版・新仏教運動」が真理運動であったと解釈できる。義兄の蔵書やラジオによる米峰の啓蒙、海旭との交流やレヴィの示唆によつて、圓諦は新仏教運動を継承する運動を興したのである。<sup>32)</sup>

新仏教運動と真理運動の相違については後に詳論するが、新仏教を一步進めたこととして特に注目すべきなのは次の点である。新仏教は井上円了の「仏教活論」を受けついで、仏教は時代に合わせて現世肯定的でなければならぬと主張した。<sup>33)</sup>これに対して圓諦は、学術的な古代仏教研究から得た結論として、仏教とはその原点において現世的なものであったと主張したのである。

圓諦は「仏教は後世考へられたやうな実世間を無視した観念論ではない」(真理S一〇一八―五)と述べ、釈迦が商工業に関する道徳をしばしば説いていたとしている。また、「釈尊にとつて重大なる役目は、つねに人間に往来して世間を利し、人天のためにはたらくことあります」と主張していた。仏陀は「ただ常識的、実践的な『正行』を要求」<sup>34)</sup>し、古代の「多くのインドの宗教の中で、めずらしく地上的で、建設的であつた」<sup>35)</sup>のが原始仏教であつた。圓諦はこれを、自身による学術的な見解として述べていた。(圓諦による原始仏教の研究に関する議論の詳細は、本稿の課題を超えるのでここでは不問に付したい)

こうした真理運動に米峰も共感したのか、彼も真理運動に参加していた様子が見える。昭和一五(一九四〇)年、京都の知恩院にお

いて開かれた講演会に、講師として圓諦の名と米峰の名が並べられている（真理S一五―三一―〇三）。その他、雑誌『真理』における米峰の寄稿は、長い文章だけでも終戦まで六回、短文も含めると一六回にも及ぶ<sup>39</sup>。その他新仏教徒同志会メンバーとしては、杉村楚人冠（真理S一〇―一―一六三など）や加藤咄堂（真理S一四―一―一六八―七二）なども寄稿している。昭和一三（一九三八）年当時の新仏教徒同志会について加藤咄堂は「当初の青年、今は老年、意気は旺んだが、各自其活動を自由にして居るから集団としては談話会と同人雑誌に名称を留めて居る位だ」（真理S一三―二―四六）と述べている。やはり実働部隊としては、真理運動がその代わりをしたと解釈して良い。真理運動は新仏教運動を受けついでと認識していたが、新仏教徒も真理運動に期待するものがあつたのではないか。

## II 真理運動の展開

### 1 真理運動の発端、運動の実態、特徴

昭和九（一九三四）年二月の中旬頃、第一書房で仲間の将棋の観戦をしていた友松圓諦へ、日本放送協会放送部長であつた矢部健次郎から会いたいという電話があつた。翌日放送協会へ行くと、三月一日から二週間、毎朝三〇分ほど仏典の講義をして欲しいという依頼があつたという<sup>38</sup>。これが真理運動の発端である。

圓諦は一五日間『法句経』について、「原稿を読まずにメモを片手に三十分間の放送<sup>38</sup>」を行なつた。放送が終了する前から、放送協会へ

大量の手紙が届き、その数は数百通にもなったという。その反響は爆発的なものであり、日本放送協会も「聖典講義は昭和九年の放送史を飾る一大収穫である」と述べた<sup>40</sup>。歴史的とも言うべき反響を呼んだ原因について、圓諦は当時仏教を求めような「時代思想の動き流れ」があつたこと、『法句経』の講義は若いころから行なつていたので「自分としても多少の自信はあつた」こと、さらに「滞欧四年のあと帰朝したので多少私の身についていた新鮮な西欧的気分も幾らか役に立つたのかもしれない」と述べている<sup>40</sup>。

この反響を受けて第一書房から、圓諦と、ラジオの「般若心経講義」で人気を呼んだ高神覺昇を中心に、雑誌を刊行しようという提案を受けた（真理S一四―一―〇一―一七）。協議の結果、パトロンであつた藤井栄三郎の援助もあつて、雑誌の刊行は独自に行なうこととなつた。当初の中心メンバーはこの三人の他に松岡譲と江部鴨村がいる。昭和九（一九三四）年九月一日銀座に事務所を構えて真理運動の発足とし、翌年一月の『真理』創刊号までは第一書房発行の雑誌『セルパン』で運動の紹介を行なつた（真理S一四―一―〇一―一七）。『真理』創刊まで四ヵ月余りの間に既に全国に二〇〇以上の支部が出来ていた<sup>41</sup>。

運動の目的は「一言で言へば、すべての人々に人間生活の指導原理を与へ、人生の価値に目覚めさせたい」（真理S一〇―一―一五七―八）と説明している。こうした運動を六年前から待望していたという人もおり（真理S一〇―三―一六〇）、圓諦自身も「おそかれ、早かれ、誰人かによつて起されねばならないところのものであつた」（真理S一〇―二―二）と述べている。恐らくは米峰ら新仏教徒同志会による

頻繁なラジオ出演によって、既に機は熟していたのであって、彼らが説く理念を実際の行動に移すことが待ち望まれていたのではないか。その具体的な受け皿となったのが、真理運動であったと考えられる。

運動の具体的な行動は、主に四点挙げられる。第一に地方で支部を作ることに、第二に全国大会を開くこと、第三に機関誌を発行すること、第四に山中結衆を行なうことである。

支部の作り方について『真理』は具体的に指南している。支部は五人いれば結成でき(真理S一三―四―一四六―七)、支部が集まって支部連合となっていた。支部の具体的な活動としては、定例講話会、仏典研究会、座談会などを行なっていた。座談会では、日々の生活における仏教的反省が話し合われたようである。地方ごとに機関誌を発行することもあり、『大阪真理』は非常な反響を呼んだ(真理S一〇―四―一五九)。圓諦は機会あることにこうした支部連合をまわって演説を行ない、九州や(真理S二―八―五四―九)朝鮮へも出講していた(真理S一三―七―九九―一〇八)。

全国大会は、第一回が名を「第一回全国同信大会」といい、昭和一年(一九三五)年一月二三日の二日間に渡って行なわれた(真理S一〇―一―一三〇―一、S二―一―一三二―四―七)。場所は日比谷公会堂と日本青年館であり、各地方の同信代表などが一五〇〇人、一般参加者が二五〇〇人の合計四〇〇〇人が集まったという。内容は、日比谷公会堂では、真理同信聖歌の斉唱、開会の辞、大会宣言の朗読、各地方同信の挨拶、高神覚昇と圓諦の演説などがあった。次に車三〇〇台で日本青年館へ移動し、圓諦らの法話の後、各地方同信の活動報

告があった。二日目は日本青年館で聖歌斉唱のあと覚昇の法話、総会、職業別の部会(商工業、婦人、教育者、教役者、医師、交通関係、学生の七部会)があり、地方別部会も催された。閉会の辞の後は晩餐会があり、晩餐会の参加者は二〇〇名であったという。第二回大会は昭和一年(一九三六)年一月二三日、大阪の実相寺と国民会館などで行なわれた(真理S二―一―九一―八三、S二―一―一七〇―四)。この時は大阪の街中にポスターや立て看板が数多く立てられ、二〇〇〇人が集まった。その後の雑誌『真理』には五周年大会の模様も記されている(真理S一三―一―一〇―一)。

機関誌は中心となったのが月刊誌『真理』であり、創刊号は三万部が発行された(真理S一〇―一―一五五)。「真理」は後に述べるように「論文事件」をきっかけに一般書店での再販をとりやめ、同信への直接販売となった。昭和一年(一九三六)年の八月頃には、『真理』、『真理の友』、『仏教』の三誌がそろい(真理S一―九一―七六)、これが真理運動の中心的機関誌として位置づけられるようになった。『真理の友』は真理運動の活動の実際を指南した内容だったようであり、『仏教』は仏教学の専門的な内容である。さらに昭和一年(一九三九)年から『二日一訓』というカレンダーも発刊した(真理S一三―一―一三九)。他にも『全日本真理運動』という新聞も発刊していたが、これは『仏教』と共に、昭和一年四月から『真理』へ併合されている(真理S一三―四―一三三)。

山中結衆は、毎年一回富士山麓山中湖畔で行なう合宿であり、第一回の結衆は昭和一〇(一九三五)年八月二日から六日まで行なわれた。

具体的な活動については次のように紹介されている。

五日間の結衆生活を簡単にしるせば、まづ午前四時半木柘の音とともに起床、講師とともに普新行に移り、朝の爽涼の中に長養行をつとめ、五時より厳肅な晨朝謹行に入り、友松・高神両師が交互に曉天講話を行ひ、六時半朝食、八時より講義、十一時半時食、午後一時よりふた、び講義に入り、衆議会によつて真理運動の実践について意見を闘はせ、教育者、教役者、実業家、農村人、女性、等の各種連盟の協議会と行動方針を決定。午後三時より六時までの長養、無垢両行ののち夕食をした、め、食後経安、軽行と称して思ひ思ひに森林や湖邊を逍遙してしづかな信仰のものがたりにふける。

夕風の訪れとともに一同は演習と衆議に時を忘れ、午後九時のタイムとともに初夜偈の禪けさのうちに就寝。(真理S一〇—九—一五五)

この記事から考えると、活動の大半は講義か討論のようであり、勉強会の合宿としての性格が強かったようである。合宿では仏教的な思想を如何に日々の生活に活かすかが議論され、ここで話し合われた成果は各地方の支部で広められて、同信の日々の実践として活かされた。この山中結衆は雑誌『真理』で比較的詳しく紹介されていると言つて良い。

さらに真理運動の特徴を四点挙げるとすると、第一に超宗派の活動

であること、第二に経済活動と宗教的反省を結びつけようとする傾向が強いこと、第三に女性や二〇代の若者が比較的多いこと、第四に都市部の人々による活動が多かったことが指摘できる。

超宗派であることに関して、圓諦は「私達は決してこの運動によつて新宗派を建設しやうなどとはおくびにも思つてゐないことを明瞭に申上げて置きます」(真理S一〇—二—三)と述べている。真理運動は「基督教でも、天理教でもどんな宗派の方でも抱擁してゆく」(真理S一一—四—一五六)運動であった。

また経済活動との連関について言及は多いが、例えば「商売は信用が大事だ。真面目にやればきつとうだつがあがる。お客の役に立つのが商道だ」(真理S二—九—九〇)と主張していた。詳細は後述するが、彼らは近代資本主義に肯定的であり、資本主義的な活動の中で如何に道徳的であるべきかを議論していたのである。

若者が多いことについて圓諦は、「統計の示すところに従へば『同信教役者』の年齢は大体は二十台の春秋に富む人々のみである」(真理S一〇—七—八)としている。女性が反応したことについても、次のように言っている。

去年の春、法句経の放送講義がまだをはらぬうちから、私はおびたゞしい書信をうけとつたことであるが、そのうちの先づ三分の二に近いものは女性であったやうに記憶してゐる。講義がをはつてからも、毎日幾組かの訪問者をうけたが、その大半は御婦人であった。思へば、その当時の、初めてお目にかゝつた女性方が今

日の全日本真理運動の中心的勢力の一部をなしてみられるのである。(真理S一〇—二二—)

当時は教育の機会に恵まれない女性が多かったと思われるが、真理運動はこうした人々に受け入れられていったのである。

真理運動は都会を中心に広がった運動であった。先の経済の重視とも重なるが、圓諦は次のように言っている。

(真理運動は) ぐんぐんと、日夜勤労の生活をいと喜んでゐる階級にひろがって行きつゝ、ある。とりわけ、最近、大阪と東京との情勢はこの傾向を最もよく物語つてゐる。今や、仏教の根本精神は机上の空論や、専門学者のいぢくりまはす学説ではなく、現実、実際に、その商店、会社、銀行、工場の中にうごき出さうとしてゐる。といふよりは、真理運動に参加せる商店、会社、工場が正しい全面的な発展を示さうとさへしてゐることは最も注目にあたひする。しかも、それは、その商店の代表者、主人格の人々の発展にはじまつたのでなくして、むしろ、主人達の知らぬ間に、先づ、店員達が自発的に、自主的にうごき出してきたのである。(真理S一〇—八—)

大阪への広がりについては後に議論するが、ここで重要なことは「商店、会社、銀行、工場」への運動が浸透したことである。特に「大阪と東京」に広がったことは、圓諦の説く思想が農民や漁民向け

というよりは、都会で生活するサラリーマンや経営者向きの思想であったことを物語っている。

## 2 「論文事件」とその影響<sup>(48)</sup>

初期の真理運動の中で「論文事件」と呼ばれる事件があった。この事件をきっかけに、運動は多少の路線変更を行なっている。事件とは、友松圓諦がゴーストライターに書かせた論文の中に盗作があったことである。岩波書店が昭和一〇(一九三五)年五月に発行した『東洋思想』の中の「印度社会経済思想」は、圓諦の名による論文だが、その一部が大島長三郎による未発表の論文「仏陀時代に於ける仏教と社会との交渉」の無断転用だった。事件の発覚は昭和一一(一九三六)年の六月である。圓諦は、大島に謝罪して学会を引退することになった。ゴーストライターは、越智道順であったと記されている(真理S一一—七—七八)。圓諦は「こゝに静居常在したい決意」(真理S一一—九)を表明してしばらくの間は表立った活動を自粛した。後の圓諦はこの事件を回想して「この事件で真理運動は大分脱落者を出したし、越智、増谷(文雄)君を初め初期の幹部は大半ひきさがってしまった<sup>(49)</sup>」と述べている。

幹部に脱落者を出したのは事実であるが、真理運動全体として、「大分脱落者を出した」というのは圓諦の記憶違いであろう。表1やグラフ2を見ると、「論文事件」の昭和一一年六月以前の同信総数は増加率が徐々に鈍り、総数二五〇〇〇人未満で頭打ちのように見える。しかし表2の様に、その後の同信の数は二五〇〇〇を超えており、増

表1 真理運動・同信総数・支部総数（『真理』各号の編集後記より作成）

	同信総数	支部総数
昭和9年12月	5067	224
昭和10年1月	6953	277
昭和10年2月	8501	353
昭和10年3月	9925	414
昭和10年4月	11844	495
昭和10年5月	13159	542
昭和10年6月	14419	594
昭和10年7月	15646	667
昭和10年8月	16612	729
昭和10年9月	17266	754
昭和10年10月	17843	786
昭和10年11月	19290	836
昭和10年12月	20212	865
昭和11年1月	20773	886
昭和11年2月	21214	906
昭和11年3月	21527	919
昭和11年4月	21822	929
昭和11年5月	22143	949
昭和11年6月	22576	969
昭和11年7月	22765	976
昭和11年8月	22901	981

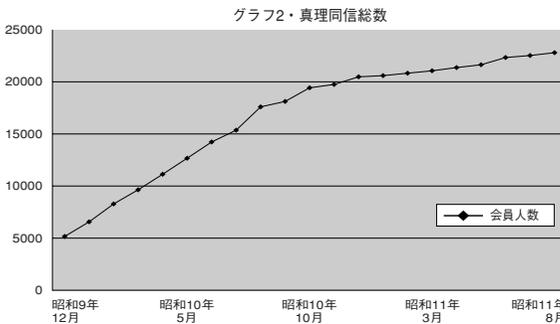
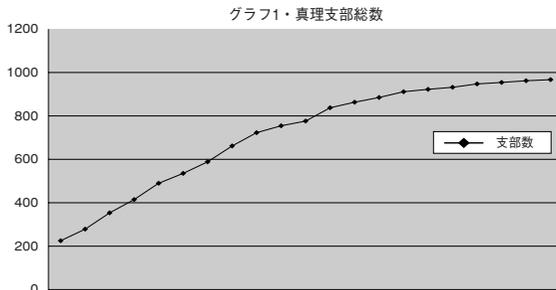


表2 「論文事件」後の真理同信総数（各号の「真理ニュース」や「真理運動とは」等から）

	同信総数
昭和12年6月	24179
昭和12年8月	24513
昭和12年10月	24768
昭和12年11月	24907
昭和13年1月	25084
昭和13年3月	25167
昭和13年5月	25217
昭和13年6月	25256

加するもの一向に減少していない。もちろん事実上の幽霊会員になった同信もいたであろうが、データ上からは同信の減少は確認できない。<sup>50</sup>「論文事件」の後、昭和一一年の九月号で圓諦は「最近、会員の申し込みや、会費の新納が激増してゐる」（真理S二一九―七四）と言っているので、当時の圓諦は「論文事件」をきっかけに同信が増加したことを認識していた。恐らくは、圓諦の事件に対する真摯な対応が、人々の共感を呼んだために増加したのではないだろうか。

また「論文事件」は、真理運動に質的な変化ももたらした。事件以前の圓諦は「真理運動は真面目すぎるから、中々経済的な基礎が出来

ない。もっと経営を考へなくてはいけないと思つてゐる」（真理S二一六―一二二）と述べている。事件以前は、運動の財政に苦慮していたことがうかがえる。

「論文事件」以前から雑誌『真理』は「市場を去つて同信だけの機関誌にしてほしい」（真理S二一七―一〇六）という声もあり、この事件をきっかけに広く普及するより「質」の時代がきた」と考えられるようになった。圓諦は「私は真理をぢみにやってゆきたい」と述べ、雑誌『真理』は「今度からは全部事務所から直送」（同―一〇七）になった。圓諦は、「書店委託販売といふものは私達のやうな学

問畑に育った者のやりきれぬ者ではない」と言っている。<sup>51)</sup>

しかしこうした改革の結果、昭和二年の一月月号で圓諦は「運動の財政が日と共に順調になってきた」（真理S一〇一―一七七）と言っている。また同信の間に危機意識が広がったのか寄付を申し出る人が全国各地より出て、これが「篤志財」として制度化されることになった（真理S一四一―一〇一―一七）。「篤志財」は、年間「二三千円の巨額」にのぼったという。その後も一口一円から寄付を募り、一人で一〇〇〇円を寄付する人も出るなど（真理S一四一―二二―五五）、財政的には安定したようである。「論文事件」は真理運動にとって試練であったが、結果的に財政も安定させることになった。

### 3 大阪における真理運動―軌道に乗るまで―

友松圓諦が運動の普及に特に力を入れたのは、東京以外では大阪であった。松下幸之助が住んでいた大阪に、真理運動はどのように波及したのであろうか。

最も早い記事では、『真理』創刊号で既に真理運動について「大阪における市民大衆へのアピールがあった」（真理S一〇一―一五六）と書いてある。正確にこれがいつであったのかははっきりしない。この時は大阪に限らず、ラジオの反響を受けて真理運動の開始は各地方で宣言されていたので、その一環であると解釈して良いであろう。

また昭和九（一九三四）年二月一日、大阪毎日新聞社主催によって中之島中央公会堂で「友松圓諦氏大講演会」（真理S一〇一―二一―一八）が開かれた。聴衆は三〇〇〇人だった（真理S一〇一―一〇一―

三一）。既に高神覚昇による同地での演説会は、四〇〇〇人の聴衆を前にして九月に開催済みであった（真理S一〇一―一〇一―三〇）。この時の圓諦の来阪をきっかけに、天王寺高等女学校講堂で大阪の同信大会が開かれた。会は大阪市連合支部を結成するとの決議を採択している（真理S一〇一―二一―一九）。

昭和一〇（一九三五）年二月一日、再び来阪した圓諦を招き、北区堂ビル清交社ホールにて、五〇〇余名の同信は「大阪連支結成式」を開いた。会の宣言は「我等同信は一宗一派に偏せず、純真なる仏教徒として現代日本に鬱積せる不安焦燥を一掃し、光明返照の世界を建設せんと念願する」（真理S一〇一―三一―一五七）と述べている。

この時点で圓諦は必ずしも大阪の状態を楽観していなかったようである。圓諦は次のように述べている。

何かの結果を期待し、あかしを求めることは正しい宗教生活じゃないのです。大阪に行きました時「真理運動もあれですぐ何かの功德がある、と約束してくれましたら、大阪の人間は十万人位一どきに入りますよ」といふ人がありましたが、さういふ同信は真平ご免蒙りたいと思ひます。（真理S一〇一―四一―一四七）

圓諦はまだ大阪における真理運動に懐疑的だったのかも知れない。しかし、その後の『真理』は陸続と結成される大阪の支部に関する情報を毎号のように掲載している。昭和一〇年六月七月の時点で、大阪で結成された支部の数は全部で二九である。東京の一、二、静岡の六

五、京都の三二について新潟の二九と同数である（真理S一〇一六一五〇〇五、S一〇一七一六二〇七、S一〇一八一五五九）。支部一つ当りの人数は固定されていないので、支部の多さが同信の多さに比例しているわけではないが、支部の数だけを見ると、この時点の大坂の支部数はそれほど多くなかった。

昭和一〇（一九三五）年七月一七日大阪同信は、大阪朝日会館大講堂において友松圓諦を迎えた講演会を開いた。圓諦は「現代人の宗教」と題し大阪市民に近代商工業の発展の中に宗教的人間の完成道が厳然として存在することを明示し、『真理商工道』の大旗をかかげて雄々しく進まんとすることを要望（真理S一〇一九一五七）したという。

昭和一一（一九三六）年、圓諦は大阪に長期滞在する計画を立てた。真理運動が始まってから初めての長期地方滞在である。当初は、同年四月二〇日から七月一七日まで大阪を拠点に活動する予定であった（真理S一一四一五二）。ラジオ出演も予定され、在阪中に九回出演する予定であった（真理S一一五一一四七）。四月二〇日には予定通り、夫人と大阪に来て「青年学校講座聖典講義」をラジオで放送した（真理S一一六一一三六）。大阪に来た圓諦は「大阪止住記」を書き（真理S一一六一一四〇八）、大阪の様子を見て「先づ大阪をものにするのが大事だ」（同一一一七）と言っている。滞在了たのは当時の住所で大阪市東区上本町四二〇の実相寺であった（同一一四二）。既に発刊されていた『大阪真理』同年六月一日発行の第九号は、「今大阪連支では四十九支部を擁している。七月中旬の友松師大阪引上げの時までには相当の支部同信の増加を見ることである

う」（真理S一一七一三五）と言っている。この大阪滞在は成果もあったものの、「論文事件」によって急遽東京へ戻らなくてはならなくなり、滞在は六月一五日までとなった（真理S一一八一七六）。同年九月五日には第一回の「婦敬式」を大阪で開いた（真理S一一〇一八二〇三）。これがどのような意味づけの「式」なのか記事からは不明であるが、おそらく新同信の入会式のようなものではないか。これは東京と大阪だけで行なわれたようであり（同七七四）、ここにも大阪重視の姿勢を見ることができるといえる。

『真理』は同年一〇、十一月号において「真理はのびゆく 大阪の巻」と題し、二回に渡って大阪における活動を紹介している（真理S一一一〇一三〇〇三、S一一一四四〇七）。地方の詳しい活動紹介としては最初の記事である。記事は、この時の大阪の支部の数を「五十余」（真理S一一一四四）としている。大阪に日本で有名だった「食料品店」の野田屋、皮鞆屋の松崎商店、婦人部や青年会と共に、辻吟治と中村新太郎による沖電気の大坂工場、東淀川の武田製薬試験所、鐘紡の淀川工場など工業界における真理運動も紹介している。そのほか三越大阪支店などのデパートにも周囲への指導に熱心な同信がいて、日々の仕事の中で真理運動を実践していた様子が紹介されている。

昭和一一一年一〇月四日には実相寺で、圓諦による第五回の法句経講義が行なわれている（真理S一一一七七）。第一回がいつであったのかは分からない。以後、圓諦は月に一度大阪を訪れ、実相寺で

講義や講演を行なった。圓諦はこのころ「いよいよ、大阪も本物になってきた」（真理S一―二―一六五）と言っており、「大阪が月と共に量質ひとしく進んできたことを喜ばずにはゐられない」と言っている。圓諦は「第二回（全国大会）を大阪でやりたいと提案されたときには多少の不安がないでもなかった。然し今日の大阪真理運動は隔世の思ひのするほどの充実ぶりである」と述べている。ここに来て大阪における真理運動は軌道に乗ったと考えて良い。

以後、先に記したように第二回全国大会は大阪で開かれた。創立八周年大会も四五〇〇人を集めて大阪の中之島公会堂で開催されている（真理S一七―一―二三三）。昭和一五年『真理』一二月号からは「大阪通信」が連載されるようになる（真理S一五―一―九四―六）。その後の支部の数は記されていないので大阪にいくつの支部が出来たのか把握できないが、商工業者を重視する真理運動が大阪の気風と相性が良かったことは想像に難くない。松下電器は、大正時代からレストランの野田屋を利用しており、<sup>53</sup> 沖電気の大坂工場も松下電器と接点がありうる。タクシー、デパートにも真理運動が波及していたことを考えると、冒頭の引用の通り幸之助が真理運動を知っていたとしても当然であろう。

#### 4 真理運動とラジオ

##### i 真理運動におけるラジオの重要性

真理運動や友松圓諦は、ラジオと密接な関係にあった。最も古くラジオと圓諦の関係が確認できるのは、大正一四（一九二五）年三月一

一日の日記であり、「夜ラジオをきいて帰る」と書いてある。<sup>53</sup> この当時のラジオは実験放送や啓蒙が行なわれていた段階であったが、この段階で圓諦はラジオと接触していたのである。同年三月二日には仮放送が開始され、七月二日には本放送が開始された。日記を調査した実子の山本幸世は、同年の「四月三日以降は毎晩きいている」としており、聴取者としての圓諦は、ほぼ最初期からラジオを聞いていた。出演者としては、大正一五（一九二六）年頃大阪放送に出演し、昭和二（一九二七）年七月二五日にも出演している。<sup>54</sup> 同年、一月二日の日記にも出演らしき記述がある。<sup>57</sup> 昭和九（一九三四）年の「法句経講義」の前に、既に何度かラジオに出演しており、圓諦はラジオ出演のこつをつかんでいたものと思われる。

真理運動に参加した人たちは、主に圓諦の「法句経講義」を聞いて賛同した人たちであるが、圓諦も含め、彼らは今日とは違う態度でラジオを聞いていた。例えば、真理運動の最初期から幹部であった江部鴨村は次のように書いている。

今朝、裏のいちご畑で三人のちひさな子供と一緒に苺を摘んでみると、生垣を隔てた向ひの家からラジオの放送が聞こえてくる。  
（中略）

……精神一到何事か成らざらんやといふ諺もあります、皆さんも徳川家康にお倣ひになって……

音波は遠慮なく手放しに流れる。なんたる手痛い教訓ぞや。わたしは覚ええず空を仰いで「アッハハ……」と爆笑した。

「どうしたの？ おトウちゃん」と子供等が眼をまろくした。

「……………」

放送者の熱心な講演のまへに、いきなり吹き出すなんて、たとへ畑中の立聴きにしろ、赦されたい不謹慎な態度と受取られるか知れないけれど、私はなにも放送者の講演を侮蔑せんがために、まして家康その人の偉さを侮蔑せんがために吹き出したのではない。実は今の放送の言葉によって、不図、自分自身の少年時代のことが出され、それが今の放送の言葉と対照されて妙に可笑しかったからである。(真理S一〇—七—一五)

江部は畑の中でラジオを立ち聞きしていた。放送内容から思い出し笑いをしただけなのだが、それを「赦されたい不謹慎な態度」とか「放送者の講演を侮蔑せんがため」と考えて弁解している。ラジオに對するこのような態度は、今日では考えにくいものである。

昭和十一年に圓諦が大阪へ長期滞在した時、次のようなことを圓諦は書いている。

私は大阪放送局にたのまれて、毎日曜の午後九時から農村青年のために講話をしてゐた。何でもその前の晩に話したらしい。まじめな木邊さんといふ同信がこんなことを私に言はれました。「実はゆうべ、先生のお話をうかがつておましたら、村のためには一人や二人の青年が死ぬがいい、その覚悟をもつがいいと言はれたとき、私は思はずすわりなほしましたよ」。(真理S一一—七—二)

八)

この時の圓諦の話がどのようなものだったかは分からないが、この木邊という同信は、圓諦のラジオを聞いて思わず座り直したという。圓諦自身も日中戦争の初期を回顧して次のように言っている。

朝夕ラジオのアナウンサーが戦死をなされた方の名前を言ふのを聞くと座り直して聞き、傍に寝そべって居る子供にも座り直して聞くことを要求したものです。(真理S一五—六—四四)

これが当時における一般的なラジオの聞き方であったのか、それとも真理運動に参加した人たちに特有のものであったのかは分からない。しかし少なくとも真理運動に参加した人たちは、今日よりはるかに真剣にラジオを聞いていたことは間違いない。当然のことながら、これほど真面目に聞いている彼らがラジオから受ける影響は、今日とは比べものにならないほど大きなものだったはずである。

ラジオ放送が社会へ影響を与えていることも、彼らが認識していたことであつた。『真理』創刊号で圓諦は、人々が「近頃になつてだんだん仏教がラヂオや書物などで新しく紹介されたので、漸く仏教の本當の姿を幾分か認識し始めて来た」(真理S一〇—一—五四)と述べている。圓諦は座談会で「迫水さん、先刻のあなたのお話ね、あゝ言ふ意見をラヂオなんかで一般性を持つて発表されたら良いでせう」(真理S一三—三—六〇)と言ひ、ラジオの社会的影響力を明白に認

めた上でラジオ出演を勧めた場合もあった。

また、昭和一三（一九三八）年一月一日の商店法施行を受けて、午後一〇時から二〇分間「店員の時間」という番組を東京、大阪、名古屋の三局中継で第二放送から放送したが、<sup>(38)</sup>『真理』の無記名記事はラジオの「店員の時間に音楽や話を聞かせることも効果的である」〔真理S一四―八―一六〕と言っている。ラジオの「効果」は真理運動において明白に意識され、活用されていた。それは出演して啓蒙するだけでなく、聴取者として放送を有効活用することも含まれていたのである。

## ii 友松圓諦の話し方

友松圓諦は雄弁家として世に知られた人物であった。圓諦は自分の話し方について、次のように言っている。

世間で私の話風はどこからきてあるかを時折たづねられるが、正直のところ誰のまねをしたこともなし、そんな器用のことの出来る自分ではない。勿論、海老名弾正、加藤咄堂、高嶋米峰、渡邊海旭、かうした先輩のお話をきいたことはきいたが、きいたのは内容であって、技術ではない。<sup>(39)</sup>

注31の引用にもある通り、米峰の話風に興味はあったようだが、特に真似をしたとは言っていない。恐らくはこれら諸先輩を参考にしつつも、圓諦の話風自体はほぼ独自のものだったのではないか。圓諦は、

最初の講演は満一八歳の時であると証言している<sup>(40)</sup>ので、若いころから人前で話す訓練を受けていたと考えて良いであろう。

圓諦は、『真理』の昭和一三（一九三八）年六月号から一二月号まで「話の仕方」という連載を行なっている。これは人前で話すことが多かった圓諦が自分の経験を踏まえて、話し方についてまとめた連載である。内容は次の通りである。

- 六月号（無題）（総論的な内容）
- 七月号「第二課 用意」（事前の調査などについて）
- 八月号「第三講 講題」（題名の決め方）
- 九月号「第四講 声について」（声音、音量、声幅、声質など）
- 一〇月号「第五講 能所一体の位置」（立ち方や立ち位置）
- 十一月号「第六講 言語」（日常語、俗語、漢語、外国語など）
- 一二月号「第七講 発音」（日本語としての正しい発音など）

これらの連載から想像されることは、圓諦が自身の話し方を常に気にかけていて、話し方の研究を怠らなかつたということである。彼は「一生に一度でもいいから、会心の話をして死んでゆきたいと思つてゐる」（真理S一三―六―八三）と述べていた。世間から雄弁家とされながらも決して満足せず、相当に厳しい自己評価をしながらさらに上手な話し方を目指していたのである。

上手な話し方のこつについて、圓諦は「きいてゐる者の気持にはいり乍ら、自分でいい気持になることが一番き、いいと思ふ」（真理S

一三―八―九〇」と言っている。また「私の話方について、『素人じみてゐる』といふ批評をくれたものがあるが、これこそ、私のねらつてゐるところである」（真理S一三―九―七九）とも述べている。圓諦は「ええ」とか「ああ」とかいふ音はなるべく出さないようにしているとも言っており（真理S一三―二―七三）、これをラジオの雑音に喩えている。

ラジオ講演については、下村海南、永田青嵐、高嶋米峰、加藤咄堂を上手な例として挙げてゐる（真理S一三―九―七八）。逆に下手な例については「十人のうち六七人までは、どこでどう習ってきたものか、又、それとも、それがいいとも思つてゐるのか、明治初年の壮士時代を思はせるやうな『演説調』のことばをつかふ人がある」（真理S一三―一―三三）と言っている。さらに「仏教でも基督教でも『お説教』をする人には必ず形式的な抑揚、ふしまはしがあるがいやである」（真理S一三―九―七八）と述べている。圓諦の話し方は「演説調」でもなく仏教の「お説教」でもない、ラジオに相応しい新時代の話し方だったと考えられる。<sup>61</sup>

### Ⅲ 新仏教運動、真理運動、PHP運動の比較

#### 1 三者に共通の特徴

##### ①「物心一如」

真理運動は、新仏教運動を明白に受けつぎ、冒頭の引用にもある通りPHP運動も真理運動に似ていると言う人がいた。三者の運動には、

いくつかの共通点が見受けられる。

思想的な内容に関して言えば、三者の運動は「物心一如」の運動であるという点が共通している。この言葉を最初に作つた人を特定することは困難であるが、近代日本において最初に広く宣伝したのは、高嶋米峰と見て間違いないであろう。雑誌『新仏教』（一九〇〇―一五）の時代にこの言葉の用例を見つけることは出来ないが、「物質主義」と「精神主義」を調和させるといふ考えは、境野黄洋が主張している。<sup>62</sup>

米峰による最も古い用例は、恐らく大正一五（一九二六）年四月九日のものであり、同じ年の一〇月二日には次のように言っている。

唯物一元論と唯心一元論とが対立して、互に取つて下らないといふところに、争闘が発生するといふのなら、即ち物と心とが取つ組合つて、勝敗を決するといふのなら、それはチョット面白くもあるし、又、調停の道もあるのであります。そこに新に、物心一如論が生れて来るのであります。物心一如論なんて、チョット変に聞えるかも知れませぬが、兎も角、私は、この物心一如論、物と心とは、離すことの出来ないものだといふ考への上に立脚して、すべての事物を批判もし、解釈もしてゆきたいと考へて居るのであります。<sup>63</sup>

この言い方から推測するに、「物心一如」といふ言葉は米峰が作つた公算が高いのではないか。新仏教徒同志会が明治時代から同様の議論をしていたので、唯物論や唯心論への批判を意識しながら、キャッ

「チフリーズ」として「物心一如」という言葉を編み出したものと思われる。

友松圓諦も「物心一如」を主張しており（真理S二二―七―八六）、  
「物心一如の行動へ」（真理S一〇―一―一五七）と主張することもあった。松下幸之助も「PHPが目指す繁栄は、単に物だけではなく、心の豊かさをも含む、すなわち、心も豊か身も豊かな姿を意味しているのであります。言い換えますと、物心一如の繁栄であります」と述べている。恐らく三者の中で「物心一如」の使用頻度は幸之助が最も高い。幸之助は『人間を考える』の冒頭「新しい人間観の提唱」でも「物心一如の真の繁栄」を主張している。

②労働による修練・修行―「道場」としての職場―

「物心一如」の主張から、三者は近代資本主義における勤労を、一種の修行のようなものと位置づけた。高島米峰は『店頭禅』の冒頭で、「僧堂の禅にもあらず、学林の禅にもあらず、丙午出版社の帳場格子裡に、独り自ら、実参実究したところの禅なり」と述べている。店頭に座ることを、禅宗の修行と同様のものと解釈している。

友松圓諦は、これをさらに発展させて「資生産業これ仏道」（真理S一〇―八―二）という言葉を鼓吹していた。「店がそのま、道場である」（同一九）と主張し、「所在是道場」（真理S一〇―一〇―一三三）と唱えている。近代資本主義社会における全ての職場は、仏教的な道場であると解釈したのである。松下幸之助も「世間は道場である」と述べ、松下電器の社員にも常に「職場は人生の道場である」と訴えていた。

また米峰は、自身の商業活動は世の人を「真人間」にすることが目的だと主張した。圓諦も商業とは客を「真人間」（真理S一〇―八―一二）にすることだと主張している。幸之助は自分たちの仕事の目的とは「世の中の人を全部真人間にするため」と言っている。圓諦はどんな仕事であっても、その仕事を通じて「大きな世間の向上に役立ちたい」（真理S一〇―二―一五五）と考えるべきだとしたが、これは三者に共通の思想であろう。

圓諦は商業活動において人を使うということは、「人間をつくる」（真理S一〇―八―一二）ことだと主張していた。これは米峰の思想を一步進めたものと考えて良い。幸之助も、松下電器は製品をつくる前に「人をつくる」会社だと述べている。

圓諦は、一〇〇円の月給をもらっていたとしても「われ百円の月給に働してゐるだらうか」（真理S一〇―五―一五四）と考えることが大事だとした。幸之助は月給が「十万円の人であれば少なくとも三万円の働きをしなくてはならない」と主張した。圓諦は「人間といふものは自分の仕事の中に味がわかる」（真理S一〇―一―一四三）と述べたが、幸之助は「仕事の味を知ることが大切だ」としている。

③聖徳太子の奉賛

高嶋米峰、友松圓諦、松下幸之助の三者が、最も高く推奨する日本の先人は聖徳太子である。雑誌『新仏教』の時代において、特に聖徳太子に関する際だった動きは見られないが、後に米峰が中心になって大正一〇（一九二一）年、聖徳太子没後一三〇〇年記念法要が行なわれ

た。<sup>(76)</sup> その前後において、米峰による聖徳太子の本の出版も多い。<sup>(77)</sup> 聖徳太子については、新仏教徒同志会の境野黄洋も高く評価しており、加藤咄堂も「文化の父と仰ぐべく」人だとしている。<sup>(78)</sup> 聖徳太子を高く評価することは、米峰のみならず、新仏教徒同志会の主要なメンバーに共有された思想であると考えて良いであろう。

真理運動において聖徳太子は特別な存在であった。昭和一二（一九三七）年三月号の扉には青年時代の聖徳太子の肖像画が描かれ、「太子は最も進歩的な仏教青年であられた」と紹介されている。圓諦は聖徳太子のことを「日本文化の父」（真理S 一三―三―一五）と述べたり、「太子は日本人としてはすばらしく思想的に早熟であった」と主張している。<sup>(79)</sup> 太平洋戦争が始まってからは、自身の寺である「安民精舎」で、毎月第二土曜日に「十七条憲法研究会」を始めた（真理S 一七―二―七六）。

幸之助は秋山ちえ子に「尊敬なざる人」は誰かと聞かれて「ぼくは聖徳太子をあげます」と答えている。<sup>(80)</sup> 池田大作との対談においても、「私は聖徳太子という方を非常に尊敬申し上げており、それだけその業績に学ぶところが大きかった」と言っており、「私は、太子が政治的手腕を発揮されたその根底に、仏教をおいておられるということによって、なおいっそう太子を尊敬するのです」と述べている。<sup>(81)</sup>

④ 学校教育批判―仏教的知性から―  
新仏教運動は、当時の学校教育に対して批判的であり、これを知育の偏重であるとした。高島米峰は当時の初等教育が「児童に何事かを

詰め込んで居る」として、実社会における労働から学ぶことを重視した。苦学するくらいなら「一念発起して、小僧となれ、丁稚となれ、職工となれ、真の牛乳屋となれ、真の新聞配達夫となれ、真の車挽きとなれ」と主張していた。<sup>(82)</sup>

友松圓諦はこの主張を相続し、「今日の学校は知恵ばかり教へるのです」（真理S 一〇―二―一四八）と主張する。インテリは「素直に物にとびこむには知識をもちすぎている」（真理S 一二―九―九）とし、「インテリの弱さ」を主張した。明治維新以来の教育は「偏智教育、主智教育、科学万能」であるとしたが、これはそれまでの学校教育が仏教的知性を軽んじてきたことを批判の主眼としている。

松下幸之助も「インテリの弱さ」について頻繁に議論しているが、「わが国でもよく『インテリの弱さ』という言葉を聞きます」という言い方をしている。どこでこの言葉を聞いたのかは明言していない。他の書でも「インテリの弱さ」という言葉を「よく耳にする」と言っている。<sup>(83)</sup> その上でこの言葉は非常に正鵠を得ているとし、賛同している。学校教育をほとんど受けていない幸之助がインテリを批判することは、かなり思い切った発言であるが、これは圓諦の主張が背景にあると考えて良いのではないか。

⑤ 音声的知性―「声」の思想としての三運動―  
高嶋米峰はその生涯において、自らの思想を多く「声」で表現した思想家であった。彼がそれまでの思想家と決定的に異なる点は、彼が最初期のラジオ放送に「何百回」と出演したことであった。思想を伝

えるのに、目前の弟子に口頭で教えるか、本を記すしかなかったこれまでの思想家と違い、米峰はラジオによって多くの人々に自らの思想を聞かせた人であった。

話し方は本人によると「放送の場合大抵筋書だけで喋るか、原稿も筋書も無しで喋るかして居た」という。また「マイクロホンを人の頭のやうに見立てたり、あるひは自分自身で目標をこしらへて、それを目あてに、これを説き伏せてやるといふ気持でやる」とも述べている。昭和一二(一九三九)年当時日本放送協会の報道部にいた成澤玲川は「周知のように高嶋さんは初期放送の功労者であり講演放送の名人」だったと述べている。同じく日本放送協会に長く勤務していた矢部謙次郎も、米峰のことを「ラジオ講演者としては下村海南、永田青嵐氏等と共に、稀れな名手であった」としている。

また新仏教徒同志会には、境野黄洋や加藤咄堂など、演説の名手がおり、優秀な話し手がそろっていた。彼らは、思想的内容はもとより、演説の上手さもあって、ラジオ向きの思想家集団であったと言うことができる。

友松圓諦がラジオ講演によって世に出たことや、真理運動において演説や座談が重要な位置を占めていたことは既出の通りである。圓諦は真理運動に先立って、「声」の文化の重要性を理論的に考えていた。圓諦は「文字の世界より不立文字の世界へ」と主張していた。彼は「文字になりますとかざりの世界です」と述べ、「此世界を破って行かうとしたのが、仏教の狙ふところ」とか、「弾力性のある一つの大きな不立文字の世界、こんな世界こそが、宗教の望むところ」として

る。

これは「意識の世界より無識の境へ」行くことも意味していた。日本の歴史においては、平安時代を文弱による文字に流れた時代と解釈し、鎌倉時代を不立文字の時代であったとしている。その上で、これからの時代は不立文字の世界を重視して行くべきだと考えた。以後、この発想に基づいて、真理運動は演説や講話、職場における実働など、必ずしも文字を使わない形で展開されることになる。

松下幸之助は、その生涯において自身の思想を「声」で表現し続けた人であった。彼が生涯のうちに出版した四〇余冊の本は、全て口述筆記か代筆によるものであり、彼自身がペンを握って書いたものは一冊もない。口述筆記の方法について、秘書であった江口克彦が詳しく証言している。幸之助は書きかけの自分の原稿ですら、黙読せずに部下に音読させて耳で推敲を行っていた。江口は「飛行機や新幹線のなかでも原稿を読まされた」と言っており、普通の人ならば黙読するような環境でも音読させて「声」によって自分の原稿の文章を考えていたのである。経営においても、幸之助は「電話で仕事をすると述べ、「声」による情報を重視していた。

幸之助は尋常小学校中退で、母親は「幸之助は学校へろくに行かず、字もよう書けん」と心配した。しかし、父親は「商売やったら、字を知らんでもやっていける」と考え、夜学へ通うことに反対した。幸之助自身も、奉公時代から大阪電灯に勤務していたころまで「字を書くことは、とんとやらなかった」と述べている。その幸之助が「つとめて」聞くようにしていると述べたのがラジオの宗教番組であった。幸

之助は自身の勉強の手段がラジオであったと強調して証言したことはなかったようであるが、ラジオによって人知れず勉強を行ない、文字の読み書きが苦手なハンディキャップを乗り越えていたと想像される。<sup>(14)</sup>

現在PHP総合研究所第一研究本部には、幸之助の講話や対談の録音テープが約三〇〇本残っている。逆に手書きの手紙などは、松下電器社史室を含めても非常に少ない。幸之助もまた「不立文字」の世界に生きた人であった。

三者の運動は雑誌や単行本の刊行も伴っていたが、その主となる表現が「声」であった点は特に強調して良い。この「声」の思想は、物証が残りにくく、特に戦前のラジオ放送は録音もほとんど残っていないので、紙媒体の思想から内容を読みとるといふ特殊な作業を通じないとその全貌を想像することができない。今日まで幸之助が影響を受けた思想の分りにくかった最大の原因は、彼が明治以降続く「声」の思想史の流れを汲んでいたことであろう。

#### ⑥その他

三者に共通の思想として、他に仏教の「諸行無常」を進歩や発展と解釈する点がある。雑誌『新仏教』の時代から、米峰に進歩発展の主張があったが、後にこれを「諸行無常」と結びつけるようになる。米峰は「諸行無常なるが故に進歩発達」と述べ、宇宙は「生成し発展」していると解釈した。

友松圓諦も「真理は生長発展の道理である」(真理S一一一〇一

七四)と述べ、「進化発展の原則が無常」の意味するところとしてい

る。幸之助も「生成発展」を重視し、「生成発展という言葉を使い

えますと、すなわち諸行無常ということがあります」と述べていた。

三者は労働者の休日も重視した。米峰は「休むべき機会を与へること」を主張し、圓諦も「必ず心のゆるみといふものがなくては叶はぬ」(真理S二二一八一六)と述べていた。松下電器は、戦前において周囲に先駆けて週休制を導入し、戦後は日本初の週休二日制を導入している。<sup>(15)</sup>

#### 2 新仏教運動と真理運動にあってPHP運動にない特徴

##### ①宗教団体としての自覚

三者の運動は、それぞれ非常に似通った面があったものの、必ずしも一致しない部分もあった。ここではそれぞれの特徴を明らかにするために、あえて一致しない部分を取り上げたい。

友松圓諦は、真理運動について「新正に理解された仏教的信念に基いて一貫した態度をとってゆかう」(真理S一〇一一三)と述べていた。真理運動とは、キリスト教など他の宗教に配慮しつつも、基本的に仏教的な運動であると自覚されたものであった。新仏教運動もまた、宗教的ではないという批判がつきまといながらも、あくまで仏教と連関のある運動であるという自覚を持った。一方のPHP運動は、宗教運動を内包しつつも、宗教そのものではないという自覚を持っていた。幸之助は「PHPは教団でも、宗教団体でもありません」と述べ、宗教そのものからは一定の距離を取ろうとしていた。

②何を継承しているか

新仏教運動は、井上円了の『仏教活論』の継承を自覚した運動であった。<sup>126</sup> 真理運動は、先の引用にもある通り、新仏教運動を継承している自覚があった（真理S一〇―七―二―三）。PH P運動は、思想的內容や運動の形態も含め新仏教運動や真理運動に非常に似ているにもかかわらず、これを継承しているとは述べていない。特に冒頭の引用にもある通り、真理運動に似ていると気づいた人もいたが、幸之助は真理運動との連関を明確にしていない。近代日本史上において自分の思想がどこに位置づけられるか、幸之助は余り問題にしなかった傾向にある。

③指導者と高等教育

新仏教運動は、高等教育を受けた人や仏教的訓練を受けた人が牽引した。境野黄洋と高嶋米峰は哲学館出身であるし、加藤咄堂や杉村楚人冠もそれぞれ仏教的訓練や高等教育を受けている。真理運動を主導した友松圓諦や事実上の副代表格であった高神覚昇も高等教育と仏教的訓練を両方受けている。

ところがPH P運動を主導した松下幸之助は尋常小学校中退であり、本人も再三述べるように、何か本を読んで自らの思想を形成したわけではない。<sup>127</sup> 新仏教や真理運動が、その主張の根拠を多く仏教的な思想に求めたのに対し、PH Pは幸之助の経験だけが根拠とされてきた。幸之助が自分の思想的位置を充分に理解出来なかったのは、彼が

正規の教育をほとんど受けなかったためだと考えて良いであろう。

また、米峰には『仏教の全貌』（学風書院、一九五七年）、圓諦には『仏教に於ける分配の理論と実際』上巻（春秋社、一九六五年）、中巻（同、一九七〇年）のように学術的な著作があるが、幸之助にはこれに該当するものはない。

3 新仏教運動とPH P運動にあつて真理運動にない特徴

①指導者の実業経験

高嶋米峰は鶏声堂（一九〇一―三四年）、丙午出版社（一九〇六―三四年）を経営し、経営者としての実務経験があった。幸之助は二代から自身の会社を経営し、実業家としての経験は豊富であった。両者とも実業の経験から思想を形成し、またその思想に基づいて実業活動を行なう人物であった。

これらに対し、圓諦は先の引用にもある通り「学問畑に育った」（真理S一―七―一〇七）人であるし、謙遜も込めてか「世間の知識ということになると皆無といつていいほどの貧困」<sup>128</sup>であったと言っている。三者の運動とも経済活動を重視したが、米峰や幸之助が自身の経済活動の体験談を主張にじませることができたのに対し、圓諦はそれができなかった。圓諦は、自身の体験談となると、家族の話や地方で公演した経験を述べる場合が多かった。<sup>129</sup>

②税制に関する議論

実業経験の有無に関係あるのか不明であるが、三者のうち戦前の友

松圓諦は税金に関する議論をした形跡がない。少なくとも創刊から太平洋戦争開始までの雑誌『真理』で、税金に関する議論をしているところは見あたらない。高嶋米峰や松下幸之助は、比較的この議論を好んでおり、詳細は異なるものの、両者には税制改革の持論があった。<sup>(12)</sup>

### ③ 政府批判

後に「IV 真理運動の戦争肯定」で分析するが、戦前の真理運動は政府に対して厳しい批判の目を向けたことがない。部分的な批判はあるものの、基本的に政府の政策に対して従順であった。これは「社会の根本的改善を期す」と宣言し、政府によって雑誌廃刊にまで追い込まれた『新仏教』<sup>(13)</sup>とは異なり、後に松下政経塾設立へ発展して政治の改革を目指したPHP運動とも異なる。これも友松圓諦の経験と関係があるのかも知れないが、真理運動は他の二者に比べて社会科学的な議論が弱い傾向にある。圓諦は三者の中で唯一大学で経済学を学んでいるが、政治や経済の議論はそれほど得意ではなかったようである。

## 4 真理運動とPHP運動にあつて新仏教運動にない特徴

### ① 人間は万物の王者

真理運動は新仏教運動を引き継いだものであったが、その基本理念をより発展させたために、新仏教運動にない思想も持つに至った。PHP運動は、そうした真理運動特有の主張にも共通するものを持っている。友松圓諦は『法句経』を重視し、その第一八二番の冒頭を「人の生

をうくるはかたく」と訳した。<sup>(14)</sup>これに注釈をつけて次のように言っている。

釈尊は、ともするとこういう人間の存在を否定し、反人間の方であつたように世間で考えていられる向きがありますけれども、決して、そうではない。人間に生まれたことはありがたいことである。ありがたいこと、すなわち滅多にないこと、他の人間ならぬ多くの生物に思いくらべて、人間であることは難きことだといわれた。すなわち人間の尊い値打ちをここに教えられたのであります。<sup>(15)</sup>

圓諦は、釈迦が「人間に生まれることは尊いことだ」と述べたとしている。この「人の生をうくるは難く」は、後に息子の諦道らが編纂した伝記が「人の生をうくるは難く 友松圓諦小伝」という題名になった通り、圓諦の思想を代表する言葉となった。

松下幸之助は昭和二六（一九五一）年九月に「人間宣言」を発表し、「人間は世の支配者となり万物の王者となる」と主張した。<sup>(16)</sup>この主張は後に発展して「人間を考える―新しい人間観の提唱―」（PHP研究所、一九七二年）にまとめられる。一見すると日本の近代思想史において唐突に出現したかのように見えるこの主張も、圓諦が述べた「人間に生まれるありがたさ」をさらに一歩進めたものだと思われる。その唐突さは緩和される。「人間は万物の王者」という主張は、その思想的先駆を『法句経』第一八二番に求めることができる。これ

と類似の思想は新仏教にはほとんど見られないと言って良いので、真理運動とPHP運動に特有の思想であると考えられる。<sup>136)</sup>

②素直な心

松下幸之助の思想の中で中心的な位置を占めるのが、「素直な心」という主張である。これと似た思想は新仏教には見られない。

一方、友松圓諦は仏教の「悟り」について説明する際に、しばしば「すなお」ということを多く使っていた。例えば釈迦の悟りについて、次のような説明をしている。

(釈迦は) そのすなおな心をもって、自然の中から「ここだな」という大きな問題、人生の意味を看取された。仏教流で申しますると飛花落葉の中に悟りを見出す。ヒラヒラと散る花や葉の中に、すなおな自然界のやわらぎの中に、悟りを見出す。したがって、彼はしばしば野辺に咲く一輪の名も知らぬ花に、また空行く白い雲に、あるいは流れゆくところの水に、さえずる小鳥に、そういったすべての自然の前に、敬虔な、合掌したいような心持を持たれたようです。<sup>137)</sup>

圓諦は、「すなおな心」をもって「人生の意味」を看取することが、釈尊の「悟り」であると説明している。圓諦は、「悟り」を「こだわり無き心境<sup>137)</sup>」と説明する場合もあった。

幸之助も仏教の「悟り」と「素直な心」が同質のものであると考え

ていた。彼は次のように言っている。

素直な心を言い換えますと、「すべてを捨てた心」じゃないかと思えます。仏教の悟りです。悟りというのは物事を真実につかむ心です。素直なることです。ですから悟った人は融通無碍です。物の実相というものを直につかめる。これが悟りの境地です。それと同じことになる心の持ち方を「素直」といっているのです。ですから素直な心が段々高まるという事は、段々悟りの境地に近づいて行くことやないかと思えます。<sup>138)</sup>

幸之助は「素直な心」は「仏教の悟り」であると説明している。他のところでは、「素直な心」の効用として、こだわらない心になると説明している<sup>139)</sup>。幸之助の説く「素直な心」は圓諦の主張と非常に似たものがあつた。

幸之助は仏教学を修めた経験がなく、寺に入って修行したこともない。「素直な心」は経験し得ても、「仏教の悟り」自体は経験したことがないはずである。つまり、ここで幸之助は明らかに自分の経験にないことを話している。この主張は誰かの思想から影響を受けたものと解積するしかない。戦前のラジオで絶大な影響力を持った圓諦が同様のことを言っているので、これは圓諦の影響と考えると良いのではないか。

③社会の公器

友松圓諦は、近代資本主義における所有の概念を仏教から考察し、

全ての財は本来公のものであると考えた。彼は全ての財について「私有でもなければ、共有でもない、天下の公物なんだ」と主張し、個々人の存在についても次のように述べる。

こう考えてくると、自分は自分のものではなくして、天下の預りもの、借りものじゃないか、世間の公器、公物じゃないか、お前はただこれを壊さないように、死ぬまで、なるべく世間の役に立つように、護り持つことだけを許されている。これを傷つけ、私し、はなはだしきは、これに最後の止めを刺すだけの資格はどこにも与えられていないのだ。これが釈尊の無我、無我所の心境であらうと思います。

圓諦が言うには、全ての財は「世間の公器」であり、個人所有や共有とすべきものはない。自分自身すらも「世間の公器」とすべき存在である。

松下幸之助も「社会の公器」という言い方を好んだ。幸之助は仕事について次のように述べている。

お互いの仕事について考えるとき、それぞれの仕事はすべて“私”のものでなく社会の公器というべきであり、したがって会社もまた、社会的な機関であると考えます。これを経営し、ここに働く、その立場は個々に違っても、一様に公の機関に奉仕する公的活動であると言わねばなりません。

幸之助にとってお互いの仕事は「社会の公器」であった。彼は終戦直後の昭和二一（一九四六）年に松下電器は「社会の公器」であると述べており、以後も「企業は社会の公器」としばしば述べていた。これは圓諦の影響であるか断定はできないが、両者がしばしば述べていた共通の言い方として取り上げることができるであろう。

#### ④世間は正しい

友松圓諦は、「世間」の正しさを主張することがあった。これもまた仏教的思想に裏付けされた発想であった。圓諦は次のように言っている。

世間にはめあき千人がゐます。よく俾が言ふことを聞かないと親が説教します。「世間様に聞いて見ろ」と世間の眼をたよります。世間といふものは道理をわかまへてゐる。世間の眼は高い。決して世の中は盲ばかりぢゃない。「天道様が付いてゐる」と言ふ言葉がうけとれる。天道様が付いて居るといふことは、世間には眼がある。道理を知つてゐる。天道様は盲ぢゃない。かう人々は世間の正義を信じた。茲に大きな信仰がある。自ら法に帰依し奉るといふことは世間を信ずることである。（真理S 一一―一二―一六

#### 二）

世間の正義を信じることは、「大きな信仰」である。これは人々の

間に自然にある考え方である。この主張に続けて圓諦は、一時的に世間が間違っていることはあるが、長い目で見た場合、世間は必ず正しい判断をすると言っている。

松下幸之助も、同様の主張をすることが多い。例えば次のように言っている。

自分は、世の中というものは非常に正しいものだと思う。世間というものは、正邪をはっきり判別する力をもっておるものだと思う。そういうところにぼくは非常に安心感をもっているんだ。幸いにして松下電器が無理をせず、何が正しいかということを考えてつつ仕事をしていたならば、必ず世間はこれを受け入れてくれるにちがいない。それは正しい世間というものが存在しているからである。<sup>(註)</sup>

幸之助もまた「世間は正しい」という認識を持っていた。この主張に続いて、世間が一時的に間違っていることはあっても、全体を通じて世間の見解は常に正しいものをつかんでいると述べている。

この主張もまた、幸之助の人生経験だけではなく、誰かの影響も加味されていたと思われる、圓諦の影響と考えることもできるのである。

⑤道は近きにあり<sup>(註)</sup>

友松圓諦は日々の生活の中に「真理」の実践を求めた。その際に、しばしば「道は近きにあり」と主張していた。例えば、当時日暮里駅

の改札係をしていた二二歳の青年が「世界全人類にとり、温き住み良き楽土の建設」をするにはどうすればよいかと質問したことがあった（真理S一四―一―一五四）。これに答えて圓諦は、改札係の仕事しながら行き来する乗客の言動の中に「日本精神」を受け止めるべきであるとアドバイスし、「道は近いところに在る」と述べている。

この「道は近きにあり」は、当時真理運動が扱っていた商品に同名の物があり、『真理』には次のような広告が見える。

朗詠文 道は近きにあり

工場会社等でさかんに読まれてゐます

一部二銭 送料十枚各三銭

代理部扱（真理S一四―七―四〇）

「十枚」として売られているところから、これはポスターかカードの様なものだと想像され、「朗詠文」とか「読まれてゐます」と表記してあるので、工場の朝会等で音読されていたものと考えられる。こうした言動は、真理運動の重要な特徴であり、真理運動が「声」の活動であったことを物語っている。

松下幸之助もしばしば「道は近きにあり」と述べている。例えば次のように述べている。

PHPでは一面政治というものをそう難しいものではないとも考えているのでございます。

と申しますのは、道は近きに在りというような言葉もありますように、本当の真理は手近なところにあるのである。捜しても捜しても求めることのできないほどの遠い彼方にあるのではない、という考えであります。<sup>(15)</sup>

ここで幸之助は「道は近きに在り」というような言葉もあります」と述べている。<sup>(16)</sup>どこかでこの言葉を聞いたかのような言い方をしている。

他にも幸之助と交流のあった散髪屋の言動を見て、幸之助は「まことに道は近きにあるという感じを持った」と述べることもあった。また、月刊誌『PH P』昭和四四（一九六九）年一月号（通巻二五八号）の特集は「道は近きにあり」であった。この号において特に圓諦の文章は確認できず、この特集についても圓諦の主張を参考にしたとは明言されていない。しかしこの時の『PH P』誌の編集長は大辺豊であり、先にも述べたように圓諦との交流が確認できる。

#### ⑥ 欧米経済学批判

先の瀧本誠一に関する考察で述べたように、友松圓諦は欧米の経済学に批判的であった。圓諦によれば、欧米の経済学説は非常に一面的であり、その思想は「貧弱」である。

同様のことは松下幸之助も主張しており、欧米経済学への批判は徹底している。幸之助は欧米の経済学説に対して、終生共感するところが多かった。例えば昭和二三（一九四八）年九月二三日のPH P定例研究講座では、「経済学なんかが進歩していなくても、人間生活、お

互いの生活が現実には豊かになり、生活が潤うというようになればそれで結構であると思うのであります」と主張している。<sup>(18)</sup>幸之助はこのころ経済学者の飯島幡司と交流があったが、その感化は余り受けなかったようである。これは幸之助の立脚する思想が欧米の経済学説とは全く異なるからだと思われ、その立脚点はやはり新仏教的な世界観ではなかったか。

#### ⑦ その他——外国に関する議論——

新仏教徒同志会には、杉村楚人冠のように海外の情勢に詳しい人もいたが、高嶋米峰は終生海外へは行かなかった。米峰が訪問したのはせいぜい台湾や満州などであり、それすらも事前に渋った（真理S一三一—一六八—七一）。外国への渡航は再三に渡って要望されたようであるが、特に本人が船を嫌いだっただけに実現しなかった。

友松圓諦はドイツとフランスに留学していたため、海外に関する議論も少なくない。松下幸之助も戦後は海外へ渡る機会があったので、海外と日本を比較した議論は多かった。これは、圓諦と幸之助に共通していると言うよりは、米峰に特殊な事情があったと考えるべきであろう。

### IV 真理運動の戦争肯定

#### 1 日中・太平洋戦争の礼賛

真理運動とPH P運動は活動の形態や思想が非常によく似ており、

松下幸之助が真理運動に参加しても不思議ではなかった。しかし幸之助は、戦後にあえて別な運動を興した。その理由を幸之助は明確にしているが、真理運動による戦争の肯定を意識したのかもしれない。ここでは、真理運動が戦争の肯定へ脱線していく過程を分析し、その原因を探りたい。

### ① 初期の態度

真理運動は、日中戦争以降、戦争に対して肯定的であった。太平洋戦争が終結するまで、戦争に対して建設的な批判はあっても、否定的な批判はしなかった。

当初の真理運動は、必ずしも政府に対して従順であろうと目指したわけではない。例えば創刊号の巻頭論文において、圓諦は次のように言っている。

若しまた社会の一部の権力者が理不尽なる横車をひかうとするならば、私達は果敢に真理の幡を樹て、その中道にかえらんことを要求するでせう。(真理S一〇—一—七)

また、戦争に関しても次のように述べていた。

直面する戦争の性質を見きはめ、主張すべき場合には敢然としてこの仏教的非戦論をふりかざし、「法」による「国家」の諫暁を断行するの覚悟がなければなりません。(真理S一〇—九—七二)

初期の頃は、このように政府批判や戦争反対がありえることを示唆していた。しかし同時に「大乘的方便」(真理一〇—一〇—三五)を主張したり、「全体主義」への共感を早い段階で示すなど(真理S一—一—二〇六)、戦争肯定への伏線は既にあつた。

### ② 日中戦争観

日中戦争が始まると、圓諦はすぐにこれについて言及した。圓諦が述べるには、この戦争は中国を「懲らすため」(真理S二—一—八一—一〇)のものであり、「日本軍はその一発の砲弾といへども『支那人を目ざます』ための啓蒙の武器であつてほしい」と述べている。しかし当初は戦争に対して冷静であり、圓諦は戦争に興奮する世論を批判して「頭をひやせ」(真理S二—一—九—二)と書いた。ここでも「道は近きにある」と述べて、浮き足立つべきではないと主張している。この時、圓諦は「この一ヶ月間、一番私の関心をあつめてゐたものは第三回目の山中結衆であつた」(真理S二—一—九—七五)と言っている。そのわずか一ヶ月後になると圓諦は戦争のための総動員を強く主張し、「今はもう支那事変についてあれこれと批判をさしはさむべき時ではない」(真理S二—一—一〇—一)と述べている。圓諦は「金あるものは金をもって、物あるものは物をもって、力あるものは力をもって、才あるものは才をもって、夫々の天分職能を通じて、『国のために』総動員するのだ」(真理S二—一—一〇—五)と言っている。さらに「非常時十年の覚悟」(真理S二—一—一—二)を提唱し、当時

の挙国一致を「一時的のものにしたいくない」(真理S一三一—一四)とまで主張した。日中戦争は、「侵略のための行動ではない」(同—七一)のであって、「邪悪をこらす」ためのものと解釈されたのである。<sup>(18)</sup>

### ③太平洋戦争へ

日中戦争に肯定的でも、圓諦は戦争の拡大には否定的であった。圓諦は次のように言っていた。

私共の前には、のりか、った船『支那事変』といふ一大手術があるではないか。手術服をきて、メスを右手にしてゐる以上、一番いけないのがわき目である。この後、断じて気を散らしてはいけない。英仏の力をむりにかりる必要はない。米ソにこびることはない。といって独伊を目的の仇にする必要もない。(真理S一四—一〇—一四)

この時の圓諦は、あくまで中国とのみ戦争するべきだと考えていた。圓諦は「しばしば、私はヒトラーやムッソリーニの如き覇道をゆくひとの尻馬に乗らぬやうに警告してきた」(同—九)と述べている。

しかし欧州で戦争が開始され、ヒトラーの電撃作戦が成功すると、圓諦は「今日までヒトラーのしたことはすばらしいものであった」(真理S一五—八—一五)と述べ、ヒトラーを参考にすべきだと主張し始めた。圓諦はヒトラーを「英傑」とか「すばらしい政治家」(同—一六)として絶賛するようになった。

翌年になると、タイ国が当時戦争中であつた日本などの国々に対して、「仏教の精神に基づいて」(真理S一六一—一四七)、「可及的速かに」戦争を止めるように訴えた。『真理』の無記名の文章は、これをタイによる「伝統的日和見の中立外交策を一步も出でぬもの」として否定している。

さらに、太平洋戦争開戦の直前に書いたと思われる論文で、圓諦は「東亜共栄圏が成立する。そこに『道』がある。道理がある」(真理S一七一—一五)と述べている。当時の『真理』に「東亜共栄圏」の語はしばしば見ることができ、圓諦はこれをどういう統治形態で、領土はどこまでと考えていたのか、全く不明である。この頃になると、特定の戦争用語だけが一人歩きし、中味のない非論理的な戦争礼賛が『真理』の中で繰り返されるようになっていた。

太平洋戦争が始まると、その直後の圓諦は悲観的であつた。「この日米英の戦争も十年はかゝる」(真理S一七—二—一五)と述べていた。ところがその後日本軍の快速進撃が伝えられると、「マレー沖の大海戦のみでなく、次から次へ、ニュースからニュースへ、丸で勝利の連続、勿体ないほどの勝利である」(真理S一七—四—二)と喜びを隠さない。開戦から一年後には巻頭論文に次のように書いている。

昭和十六年十二月八日！ 日本民族の歴史あつて以来の大業が電光の如く閃めいた日、畏くも宣戦の大詔を拝して、一億国民の魂は奮ひ起つた。我々はあの日の感激を永久に忘れることは出来ないであらう。「帝国陸海軍は今八日未明、西太平洋に於て米英軍

と戦闘状態に入れり」—あの朝のラジオ放送の声は今もはっきりと我々の胸に響いてゐる。その時、すでに遠くハワイ真珠湾に於ては我が海軍は米國太平洋艦隊を撃滅し去つてゐたのである。天佑神助といはずして何であらう。(真理S一七—二二—二)

圓諦は、もはや太平洋戦争を手放して礼賛するまでになつていたのである。

また、この主張から分かる通り、圓諦にとって太平洋戦争はラジオによつて始まつたものであった。その後の日本軍は周知の通り敗戦を重ね、やがて玉音放送を聞くことになる。敗戦の日、圓諦は日記に「何故に『日本破れしや』の嚴密なる科学的反省」が必要であると書き記した。終戦の日の圓諦にとつて、戦争をしたこと自体は問題ではなく、戦争に負けたことが問題なのであった。<sup>15)</sup>

## 2 戦争に賛成した原因

### ① 未完成だった友松圓諦の思想

欧州への留学経験もあり、大学の教壇にも立っていた友松圓諦がなぜここまで間違つた判断をしたのか、今日の観点から圓諦を責め立てることは余り生産的ではない。重要なことはその原因がどこにあったのかを求めることであろう。彼が日中戦争開始以降、戦争に関して不安定な主張をし続けたのは、第一に当時の圓諦は思想家としてまだ未完成であつたからではないか。

圓諦は晩年に『中道』（一九七一年）を書いている。最終的に仏教

の根本義を「中」に見ていたようである。<sup>16)</sup>しかし真理運動初期の圓諦は、次のように言つていた。

宮本正尊先生の如きは「中」といふものが仏教の根本義だ、だからその「中」がその後発展して行くのだといふ見方でありますが、……広い釈尊のお説きになつたと思はれます原始經典を克明に読んでまゐりますと、それに当てはまるのに多少の無理なところがあります。(真理S一〇—九—一三二)

この時の圓諦は、仏教の根本義が「中」であるという見解には否定的であつた。これは後年の圓諦とは異なると見て良いであろう。

また圓諦はその生涯を『法句經』の研究と啓蒙に捧げたと言つても良く、『法句經』こそ彼の代名詞であつた。しかし彼は一時期『法句經』から離れて『法華經』に接近したことがあつた。当時月刊誌『真理』に連載されていた「法句經講義」は昭和一三（一九三八）年の三月号で突如中断され、「法華經講義」が始まつている。「法華經講義」の初回到圓諦は次のように言つてゐる。

私はいつまでも法句經の牙城に立てこもる必要もない。時がくれば『法華經』でも『論語』でも講じさせて貰つてもわるいことではない。わるいことでないのみか、一年一年と、年をたべてくると、何となく法句經だけでは淋しいやうな、今の自分の心持をつくしてゐないやうに感じるのである。たまたまなく私といふものを

ひきしめてくれるが、何となく青年くさい狭いところがある。するどさはあるがふくよかさが足りない。そこへゆくと、法華経は温かみがある。(真理S一三—三一九二)

しかし、昭和一四(一九三九)年七月号で「法華経講義」は終わり、昭和一五(一九四〇)年九月号になると、予告もなしに「法句経講義」が再開している。圓諦による「法華経講義」は「法句経講義」に比べると、やはり内容的にも深く掘り下げていない印象を受ける。この時期、なぜ一時的に『法華経』を好んだのかは分からないが、圓諦がまだ不安定な思想であったことを物語る一つの証拠ではないだろうか。

## ②ラジオに煽られた友松圓諦

友松圓諦が徐々に戦争肯定的な発言をするようになった第二の原因は、ラジオの影響であろう。圓諦はラジオによって一躍有名になり、真理運動の同信もラジオを真剣に聞く人たちであった。真理運動はラジオと共にあったと言っても良い。

既に議論したように、圓諦は高嶋米峰のラジオ演説から大きな影響を受けたようである。また、米峰の盟友であって新仏教徒同志会の幹部であった境野黄洋のラジオ放送を聞いて、圓諦は昭和八(一九三三)年三月五日に次のように書いている。

倉田百三さんだっと思ひます。千手観音はしみじみと慈悲そのものをあらはしてゐるものだと言はれたやうに覚えてゐます。け

さも、ラヂオの宗教講座に境野博士が、やはり同じやうなことを言はれました。……私の思想はけさ十時の境野博士のお話をうかがってから、はてしもなく「千手」に結びついて動いて行きます。そして、今更のやうに、大乘仏教そのものが、あの「千手」の中に素直にあらはされてゐることに気づきました。<sup>55)</sup>

境野の放送を聞いて非常に感銘を受けた様子が伝わってくる。圓諦は最初期からラジオを聞き、またラジオに影響された人でもあった。

表3、グラフ3は、東京におけるラジオの放送時間をその内容別にしたものである。大正一四(一九二五)年度は娯楽放送が多かったものの、次の年から教養や報道も多くなり、昭和六(一九三一)年の第二放送開始以降は教養放送が圧倒的に多くなった。しばらく教養重視の放送が続くも、日中戦争開始以降は報道が増えて、やがて報道が放送の中心になる。友松が好んだラジオは教養放送主体のラジオであったはずだが、戦争が開始されるとラジオは教養を与えるよりも戦果を伝える機械となった。圓諦を世に送り出した昭和九(一九三四)年のラジオと、昭和一三(一九三八)年度以降のラジオは、聴取者にとって質的に異なるものであったと言っても過言ではない。ラジオから強い影響を受けていた圓諦や真理運動の同信の思想もまた、放送内容の変化に伴って劇的に変化したとしても不思議ではない。

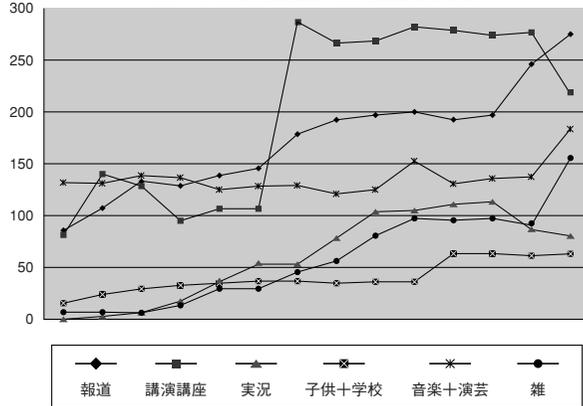
圓諦は基本的にラジオに強い信頼を置いていた。圓諦は次のように言っている。

表3 東京中央放送局一日平均放送時間の推移  
(単位分、昭和6年度以降は第二放送も足す。『昭和15年ラヂオ年鑑』95頁より)

	報道	講演講座	子供十学校	音楽十演芸	実況	雑
大正14年度	83	77	17	134	0	7
昭和元年度	112	139	25	131	1	7
昭和2年度	131	126	29	136	7	6
昭和3年度	128	97	32	133	21	15
昭和4年度	133	107	33	125	35	31
昭和5年度	147	107	34	126	51	31
昭和6年度	176	281	33	127	51	45
昭和7年度	188	231	28	122	77	57
昭和8年度	193	234	31	125	103	78
昭和9年度	200	263	31	151	105	99
昭和10年度	189	257	63	130	110	93
昭和11年度	199	249	63	137	113	95
昭和12年度	248	251	61	138	82	87
昭和13年度	275	219	63	169	80	155

どこへゆかずとも毎日新聞が家庭にはこぼれる。そとへ出かけることがきらひなひと坐してラヂオをき、雑誌や本をよむことが出来る。かうした耳目にふれるものからひと毎日教育されてゆく。ラヂオのやうに充分に国家が統制してゐるものは、多少の不満や形式化はあるにもせよ、とにかく、大きな害毒を流すことはない。その放送する音楽、演劇、ともにあやまちが少い。とこ

グラフ3・東京中央放送局一日平均放送時間の推移



オは音楽などで戦争気分を煽り、論理や理性ではなく雰囲気や感情で、国民を戦争へ誘っていったようである。圓諦はドイツ軍がマジノ線の突破したことに関する解説や(真理S一五―八―一二)、太平洋戦争の開戦(真理S一七―三―一二)もラヂオで聞いていた。

圓諦のような重要なラヂオ出演者がラヂオの強い影響を受けていた事実は、次のことも示唆している。軍国主義に傾いて行くラヂオは圓

ろが家庭の子女の目にふれる新聞雑誌を一度ゆっくり手にとってみるがいい。一流の新聞雑誌といはれるものまでが、少くとも、営利を目的とするものである以上、随分といかゞはしいものがのつてゐる。(真理S二二―四―一二)

雑誌などのメディアから人々が「毎日教育」されているという認識は正しいと言える。しかし圓諦は新聞雑誌には批判的であったにもかかわらず、ラヂオに対してはほとんど無批判であった。ラヂオ放送が戦争礼賛へ暴走した場合、圓諦はこれに流されたと考えられる。

日中戦争が開始されると「毎日のやうにラヂオで『兵隊さん、ありがたう』と言ふ童謡が放送」(真理S一二―〇―三)されたという。また「愛国行進曲は私達に力強く、この日本国民精神を朝夕にきかせてくれる」(真理S一三―三―一一)と述べているが、これも恐らくラヂオ放送であろう。日中戦争が開始されると、ラジ

諦に影響を与えたが、その圓諦が戦争を礼賛するような放送をしたのならば、聴取者であった別のラジオ出演者や番組制作者にも影響を与えたであろう。彼らがさらに戦争礼賛的な放送をすれば、再度圓諦へ影響を与えたと考えられる。この時期、日本の大衆が加速度的に戦争礼賛への色彩を強めたのは、思想的な「循環」のようなものがラジオに起り、その「循環」を通じて戦争礼賛が加速されたためではないか。丸山真男が「何となく何物かに押されつつ、ずるずると国を挙げて戦争の渦中に突入した」と分析した<sup>155</sup>、当時の大衆の集団心理は、ラジオを抜きにして語ることができないはずである。

その戦争の終結は、玉音放送というラジオ放送によってもたらされた。圓諦達当時の多くの日本人にとって、太平洋戦争はラジオに始まり、ラジオに終わった戦争だった。圓諦にとってラジオ演説は最大の武器であったが、ラジオは真理運動にとって最大の弱点だったのかも知れない。

戦後に真理運動は再開され、神田寺が創立された。圓諦の雄弁も健在であった。昭和二三（一九四八）年に圓諦が刊行した『仏教聖典』は、物のない時代にもかかわらず、二〇万部以上を売り上げた<sup>156</sup>。

しかし、ラジオでは民間放送が開始され、商業放送の時代が来た。さらにテレビジョンの出現によって、ラジオはメディアの王様ではなくなつた。スポーツ選手や芸能人が、大衆の英雄となる時代になった。ラジオの影響力が低下すると共に、圓諦の社会的影響力も低下して行く。圓諦は、ラジオ演説家が大衆の指導者だった時代に活躍した思想家であった。

真理運動がラジオを中心とする「声」の運動であったため、今日この運動を知る人は少ない。しかし松下幸之助など同じ時代を生きた人は、全国へ広まったこの運動と方々で接触していたはずである。幸之助は真理運動を知りつつも、PHP運動を別に興した。幸之助は自らの運動の名前の頭文字をPeace（＝平和）のPとした。幸之助が戦後の真理運動に参加しなかったのは、真理運動がラジオと共に戦争礼賛へ脱線した事実を意識したせいではないだろうか。

## V まとめ

今回の論文で指摘した新しい事実は、第一に松下幸之助は真理運動を何らかの形で意識していたらしいこと、第二に真理運動の「論事件」は同信の数を減らしていなかったこと、第三に真理運動は明白に新仏教運動を意識してこれを受けつごうとしていたこと、第四に「物心一如」はやはり高嶋米峰が作った語である可能性が高いこと、第五に戦前のラジオ放送は第二放送開始以降は教養放送重視であったが日中戦争開始以降は報道中心に変化したことなどが挙げられる。

しかし、これらより重要なことは、新仏教運動から真理運動を経てPHP運動へ流れて行く系譜が、「声の文化」であったという点である。幸之助が受けついで思想は、こうした「声」によって表現された思想であった。幸之助の思想の形成過程には全くと言っていいほどに物証がなく、それでいて幸之助の思想は小学校中退の人が本も読まずに独りで形成したにしては、余りにも内容がありすぎる。彼の思想が

「声の文化」の系譜上にあるとすれば、こうしたことが無理なく説明できるのではないか。これら「声」の思想史は、これまで近代日本思想史でも決して十分に考察されてこなかった。戦前の真理運動はこの「声の文化」が全盛の時代の運動であった。この「声の文化」を支えたのがラジオである。

本稿では、友松圓諦による仏教経済思想の学術研究について、ほとんど本格的な分析をしなかった。これは筆者の力量を超えるので、識者の指摘を待ちたい。また、真理運動が当時の大阪にどのように広まったのか、『真理』以外の史料も参考にしたいところであった。現在神田寺には、未整理の圓諦の資料が多く残っているそうだが、これらも識者によって本格的に調査される日が来ることを願う。幸之助との連関で言えば、幸之助が戦後のラジオ放送で宗教番組を好んだことは、本人がはっきり証言しているので、戦後のラジオ放送における圓諦の出演も今後の課題としたい。

なお圓諦は昭和四八（一九七三）年一月一六日に亡くなり、月刊誌『真理』は昭和五九（一九八四）年一二月に廃刊となった。息子の諦道が始めた真理幼稚園<sup>54</sup>は孫の浩志氏によって運営され、現在拡張しつつある。真理運動は形態を大きく変えたが、仏教を世に生かすというその精神は健在である。

【注】

- (1) 『旧速記録』三六卷（PHP総合研究所第一研究本部所蔵）、一二八～九頁。

(2) 同前一〇巻、一二九～三〇頁。

(3) 他にも、佐々木崇好著『財界の新十二傑』（雪華社、一九五七年）三八五頁は、PHP運動のことを括弧付きで「『真理運動』」としており、加藤寛『松下幸之助全研究―3 大いなる構想』（学習研究社、一九八二年）二二頁も、友松圓諦と幸之助のPHP運動との連関を示唆している。

(4) 友松圓諦『現代を生きる心7 まことの生活』（筑摩書房、一九七二年）、一三五頁。

(5) 友松圓諦は、『PHP』誌最初の一〇年間で八回の寄稿が確認できる。

①一九四七年五月号（二号）二六～七頁、「一、私の気をついた無駄、二、最も魅力を感じるもの」に短文を寄稿。

②一九四七年八月号（五号）一二頁、一三～四頁、「宗教は社会改良に如何に役立つか」にそれぞれ短文を寄稿。

③一九四九年一月号（三十一号）二七頁、「私の愛する言葉」に短文を寄稿。

④一九五〇年二月号（三四号）二〇～二頁、「若き人々に与ふ」と題する文章を寄稿。

⑤一九五〇年八月号（四〇号）三七頁、「生きるありがたさ」と題する文章を寄稿。

⑥一九五一年一月号（五二号）二六～七頁、「手離してはいけない」と題する文章を寄稿（松下幸之助の「人間宣言」に対する評価）。

- ⑦ 一九五二年一〇月号（六〇号）七頁、「私の不愉快の処理法」に短文を寄稿。
- ⑧ 一九五四年四月号（七七号）一八〜九頁、「五つの戒め—宗教家のしつけ—」と題する文章を寄稿。
- また、PHP総合研究所第一研究本部所蔵の友松圓諦『中道』（経済往来社、一九七一年）の見返しには、圓諦によると思われる「中に生きる 圓諦 大辺豊様」という署名があり、裏の見返しに別な筆跡で「昭和四十六年七月十七日 友松圓諦先生より」とある。大辺豊は、昭和四六（一九七二）年七月当時の「PHP」誌編集長である。
- (6) 友松圓諦の孫にあたる友松浩志氏は、山本幸世編集『友松圓諦日記抄 道をききてこころやすらかなり』（真理舎、一九八九年）四七三頁で、圓諦に関する先行研究を、学術、非学術を問わず一三本挙げている。このうち学術的な論文は、真柄和人「友松圓諦論（一）」（『浄土宗学研究』第一〇号、知恩院浄土宗研究所、一九七七年）である。この論文は「未完」としているが、続編は確認できなかった。また、山本泰英『照破されたる友松圓諦真理運動の全貌』（自由社、一九三五年）五二〜三頁には、当時の批判の論文が一六本紹介されている。
- (7) 友松圓諦『父心』（偕成社、一九四〇年）二六六頁。
- (8) 友松圓諦『母心』（偕成社、一九三九年）二二八頁。
- (9) 同前『母心』二八三〜五頁。
- (10) 友松圓諦『世間虚假』（誠信書房、一九五九年）一四二頁。
- (11) 友松圓諦『友松圓諦先生講話集』（東方書院、一九三五年）三七〇頁。
- (12) 前掲、『世間虚假』一六五頁。足かけ五年の意味であろうか。
- (13) 同前一二二頁。その他前掲、「友松圓諦論（一）」一七三頁は、若き圓諦に白樺派の影響があったとしている。
- (14) 友松諦道・山本幸世編『人の生をうくるは難く 友松圓諦小伝』（真理運動本部、一九七五年）五五〜六頁。後に引用する通り、『仏教経済思想研究 第一巻』の自序では、留学の費用を「内外の援助」と言っている。藤井栄三郎だけではなく、慶應義塾からも費用を得たのかもしれない。注17参照。また、友松圓諦『人生日訓365日』（日本法令、一九六四年）の「著者紹介」には、大正大学と慶應義塾大学の「両大学留学生として独、仏に四カ年留学」とある。
- (15) 前掲、『まことの生活』一三二頁。
- (16) 友松圓諦『不二の世界』（第一書房、一九三四年）二九〇頁。
- (17) 友松圓諦『仏教経済思想研究 第一巻 印度古代仏教寺院所有に関する学説』（東方書院、一九三二年）一頁。
- (18) 例えば前掲、『不二の世界』五一頁、前掲、『父心』三〇〇〜二頁など。
- (19) 以下、瀧本の略歴は、慶應義塾大学経済学部Bibliographical Database of Keio Economists内における小室正紀の「解説」と瀧本の「個人年表」に負っている。
- (20) 瀧本誠一『経済一家言』（国文堂書院、一九二〇年）七一頁。

- (21) 同前七一―九頁。
- (22) 同前七六九―七〇頁。
- (23) 瀧本誠一・豊田仁『日本法制経済史―大日本史食貨志釈―』（福田書房、一九三五年）七頁。瀧本による序文より。
- (24) 前掲、『友松圓諦先生講話集』二九九頁。圓諦が慶應義塾大学に入学した時、既に福沢諭吉は亡くなっていたので、これは福沢の思想を継承しているという意味である。
- (25) 同前二七〇頁。
- (26) 前掲、『世間虚假』一四八―九頁。同様のことを真理S一五―六一九五でも述べている。
- (27) 前掲、『まことの生活』二三四頁。友松圓諦がその後集めた明治仏教関係の資料は戦災を免れたようである。孫の友松浩志氏によると、現在も神田寺に未整理の圓諦の資料が多く残っているそうである。帰国後の圓諦が集めた明治仏教関係の資料も、現存しているものと思われる。
- (28) 前掲、『世間虚假』一七二頁。渡邊海旭については、芹川博通『渡邊海旭研究―その思想と行動』（大東出版社、一九七八年）が最も詳しい。海旭は興味深い人物であるが、本稿では十分な調査をしていない。
- (29) 高嶋米峰『隨筆 人』（大東出版社、一九三九年）一〇六頁。以下、米峰の名字は昭和一一（一九三六）年までを「高島」とし、以後を「高嶋」としたい。その人生を概観するときは「高嶋」とする。坂本慎一「高嶋米峰と松下幸之助をめぐるラジオ」『論叢 松下幸之助』第4号（PHP総合研究所、二〇〇五年）三九―四〇頁参照。
- (30) 高嶋米峰『高嶋米峰自叙伝』（学風書院、一九五〇年）「追憶」一三七頁。
- (31) 同前一三八頁。この時、友松圓諦が聞いた高嶋米峰のラジオ演説は、「連合軍の進駐を迎へて」（高嶋米峰『心の糧』（金尾文淵堂、一九四六年）七七―八三頁）であると思われる。
- (32) 戦後の友松圓諦は真理運動のことを「新仏教真理運動」と呼ぶこともあった。前掲、『人生日訓365日』一頁など。
- (33) 新仏教運動に関する詳細は坂本慎一「明治・大正期の新仏教運動」と松下幸之助―境野黄洋と高嶋米峰の思想を中心に―『論叢 松下幸之助』第3号（PHP総合研究所、二〇〇五年）を参照。
- (34) 前掲、『友松圓諦先生講話集』四七頁。
- (35) 友松圓諦『仏陀のおしえ』（講談社学術文庫、一九八〇年）二二五頁。
- (36) 友松圓諦『中道』（経済往来社、一九七一年）六七頁。
- (37) 高嶋米峰による戦前の『真理』における長い文章は、「雑録二題」（真理S二二―二四二―四）、「台湾へ行ったわけ」（真理S一三一―一六八―七二）、「身辺雑筆―遺言状―」（真理S一五―

一―三二―四)、「信仰といふ言葉」(真理S一六―一六―七)、「自分で自分を見切るな―傷痍軍人諸君に望む」(真理S一六―九―一六―二〇)、「僕と僧侶」(真理S一七―一七―二〇―三)がある。

(38) 友松圓諦『法句経講義』講談社学術文庫、一九八一年 六頁。  
この書は放送を元に単行本化されたものである。

(39) 前掲、『世間虚假』一八〇頁。また、社団法人日本放送協会編『昭和十年ラヂオ年鑑』(日本放送出版協会、一九三五年)一二六頁によると、圓諦の放送は昭和九(一九三四年)年三月一―一七日まで、日曜日以外の毎朝午前八時から八時三〇分の放送であった。高神覚昇の「般若心経講義」は同年四月三〇日―五月一二日、加藤咄堂の「菜根譚講話」が七月一六―三十一日、高島米峰の「遺教経(抄)」が八月一三―二三日であった。咄堂の放送は『放送菜根譚講話』(大東出版社、一九三四年)、米峰の放送は『遺教経講話』(明治書院、一九三四年)とそれぞれ単行本化されている。

(40) 前掲、『昭和十年ラヂオ年鑑』一二四頁。

(41) 前掲、『世間虚假』一八一頁。

(42) 昭和九(一九三四年)年三月における世帯当りのラヂオ受信機普及率は、東京で四三・一%、全国で一三・四%であった。社団法人日本放送協会編纂・発行『日本放送協会史』(一九三九年)三一六―八頁。

(43) 前掲、『世間虚假』一八二―三頁。

(44) 同前一八三頁ではこの時の支部の数を「千位」と言っているが、

後の記憶違いであろう。

(45) 米峰ら新仏教徒同志会メンバーの頻繁なラヂオ出演については、前掲、「高島米峰と松下幸之助をめぐるラヂオ」四六頁。

(46) 今回の研究で、『仏教』はいくつか現物を確認したが、『真理の友』は現物を確認できなかったため、内容は『真理』から推測するのみであった。

(47) 折り込み広告によると正式名称は『修養カレンダー一日一訓』であり、一カ月分の日めくりカレンダーであった。これはその後ほぼ毎年作るようになり、戦後に前掲、『人生日訓365日』にまとめられた。折り込み広告は、高野山大学図書館所蔵の『真理』にあったが、最初はその号に折り込んであったのか不明である。

(48) 昭和九(一九三四年)年一二月にも、西方浄土の解釈をめぐる「指方立相事件」があった。この分析には、浄土宗の知識が要求されるものと思われ、筆者の力量を超えるので本稿では扱わない。

(49) 前掲、『世間虚假』一八六頁。

(50) 『真理』は創刊号から昭和一一(一九三六)年六月号まで増谷文雄が編集を担当し、編集後記に同信総数と支部数を記載していた。その後、増谷の辞職によって編集の方法が変わり、同年九月号までは同信総数と支部数が確認できるものの、同年一〇月号からはデータが記載されていない。昭和一二(一九三七)年七月号から、時々同信総数がさまざまな箇所に記載されているが、これも戦前は昭和一三(一九三八)年七月号を最後に、記載されていないようである。今回の調査では、戦後の『真理』は充分確認してい

- ない。
- (51) このように直販にした結果、今日雑誌『真理』は非常に入手し難い。今日では古本市場にもほとんど出回っていないようであり、国会図書館といくつかの大学図書館に現存しているだけである。これは、友松圓諦や真理運動が当時においてかなりの社会的影響力を持ったにもかかわらず、今日まで余り研究されてこなかった原因の一つでもあると思われる。
- (52) 松下幸之助『私の行き方考え方』（PHP研究所、一九八六年）一六五頁。野田屋には、大阪連支の本拠が置かれていた（真理S 一一—一〇—三二）。
- (53) 前掲、『友松圓諦日記抄』二〇頁。
- (54) 同前二六頁。
- (55) 前掲、『友松圓諦小伝』（真理運動本部、一九七五年）九二頁。
- (56) 同前九三頁。
- (57) 前掲、『友松圓諦日記抄』三四頁。
- (58) 社団法人日本放送協会編『昭和十五年ラヂオ年鑑』（日本放送出版協会、一九四〇年）一四六頁。小売店主の経験もある高嶋米峰はこの番組にも出演し、「店員はかくありたい」という放送を行なっている。
- (59) 友松圓諦『これからの寺院—教化と経営—』（真理運動出版部、一九四八年）一〇七—八頁。
- (60) 前掲、『世間虚假』一四七頁。
- (61) 今日、圓諦の演説や法話は、日本音声保存発行の『法句経』の
- 世界 生きていようこび 友松圓諦』全一〇巻（カセットテープまたはCD）で聞くことができる。
- (62) 新仏教徒同志会編纂・発行『新仏教』第一巻九二九頁。その他、田中治六も『新仏教』第四巻一一六頁で同様の主張をしている。
- (63) 高嶋米峰『隨筆思ふま、』（大日本雄弁会・講談社、一九二七年）三八一頁。現在までの調査で発見できた一番古い例であるが、この調査は継続中なので、最終的な断定は避けたい。
- (64) 高嶋米峰『高嶋米峰氏大演説集』（大日本雄弁会、一九二七年）一八六—七頁。
- (65) ただし、こちらは無記名なので友松圓諦の筆によるか断定は出来ない。また、圓諦において「物心一如」という単語の使用例は、他の二者に比べるとやや少ない印象を受ける。真理運動の副代表格であった高神覚昇も「物心一如」を説いていた（高神覚昇「般若心経講義」『世界教養全集10』（平凡社、一九六三年）一四—一頁）。
- (66) 松下幸之助『PHPのことば』（PHP研究所、一九七五年）二八四頁。
- (67) 松下幸之助『人間を考える 新しい人間観の提唱・真の人間道を求めて』（PHP研究所、一九九五年）一三三頁。
- (68) 高嶋米峰『店頭禪』（日月社、一九一四年）「はしがき」三頁。
- (69) 真理S 一〇—一〇—一三三二では、圓諦は『「資生産業是仏道」といふ言葉があります」と述べており、自分が作った言葉ではないことを示唆している。この言葉を真理運動が強く推奨したのは事実であるが、出典は未詳である。

- (70) 真理運動では、実際に専用の「店員道場」を作った所もあった  
〔真理S一四一—一九八—一〇二〕。
- (71) 松下幸之助『社員稼業』（P H P 研究所、一九九一年）四七頁。
- (72) 松下幸之助『人生談義』（P H P 研究所、一九九八年）五頁。
- (73) 『新仏教』第二巻四八五頁。
- (74) 松下幸之助『物の見方 考え方』（P H P 研究所、一九八六年）一三三頁。その他前掲、『社員稼業』七八頁でも「われわれの仕事は一世の人全部を「真人間にするため」のものと主張している。
- (75) 松下幸之助『実践経営哲学』（P H P 研究所、二〇〇一年）一一四—一二三頁。P H P 総合研究所研究本部「松下幸之助発言集」編纂室編『松下幸之助発言集』（P H P 研究所、一九九二年）第二七巻一三九頁。また、同第一四巻八三頁で幸之助は「人づくりに道場がなければいけない」と主張している。
- (76) 松下幸之助『社員心得帖』（P H P 研究所、二〇〇一年）五五頁。
- (77) 同前四九頁。
- (78) 聖徳太子奉賛に関して米峰の果たした役割は大きい。画家の結城素明は、聖徳太子の名誉回復運動が「高嶋君一人の力であったと謂ふも不的当の言ではないと思ふ」（前掲「高嶋米峰自叙伝」「追憶」九八頁）と言っている。米峰自身の回顧は「聖徳太子奉賛会誕生の頃」（高嶋米峰『米峰回顧談』（学風書院、一九五一年）七八—九二頁）に詳しい。また米峰による「聖徳太子と青淵翁」（『青淵』一九四九年五—六月号〔社会教育協会〕）にも、洪沢栄一との関連で、聖徳太子の法要について書かれている。
- (79) 前掲、『高嶋米峰自叙伝』の「高嶋米峰著書目録」（二六六—七〇頁）における聖徳太子関連の本は、『聖徳太子と逆臣馬子』（大正九（一九二〇）年）、『聖徳皇太子』（大正一〇（一九二二）年）、『十七条憲法略解』（大正一〇年）、『皇太子聖徳奉賛』（昭和一〇（一九三五）年）、『訓読十七条憲法』（昭和一二（一九三七）年）、『聖徳太子』（昭和一七（一九四二）年）、『聖徳太子正伝』（昭和二三（一九四八）年）がある。
- (80) 境野黄洋『日本仏教小史』（鴻盟社、一九二一年）八—一七頁。
- (81) 加藤咄堂『仏教と人生—仏教入門—』（東南書房、一九五二年）一七五頁。
- (82) 前掲、『世間虚假』二九頁。
- (83) 戦火の拡大に伴って思想統制が厳しくなると、真理運動は一時的に「聖徳太子十七条憲法鑽仰会」と改称された（前掲、『友松圓諦小伝』一三五—六頁）。この時『十七条憲法』の定本を決めたり、訓読法を統一する運動を行なったが、ここでも圓諦と米峰の協働が確認できる。
- (84) 前掲、『松下幸之助発言集』第二巻三〇四頁。
- (85) 松下幸之助・池田大作『人生問答』上（潮出版、一九七五年）一三三頁。
- (86) 同前三二〇頁。
- (87) ただし終戦直後の最初期P H P 運動における幸之助の言動には、聖徳太子に関するものは今のところ見あたらない。この頃の運動は、史料が不十分である。

- (88) 『新仏教』一六卷四〇四頁。
- (89) 高島米峰『理想的商業』（丙午出版社、一九一〇年）七四頁。
- (90) 前掲、『友松圓諦先生講話集』二四八頁。
- (91) 同前二九三頁。
- (92) 前掲、『社員心得帖』七四頁。
- (93) 例えば、松下幸之助『その心意気やよし』（PHP研究所、一九九二年）一三三頁、同『人間としての成功』（PHP研究所、一九九四年）一二四頁では、「よく耳にする言葉」と言い、同『思うまま』（PHP研究所、一九九八年）七八頁では「ということばもあつて」と言っている。幸之助本人は「インテリの弱さ」を自分が作った言葉だとは言っていない。
- (94) じつじつはWalter Ong, *Orality and Literacy*, Methuen & Co.Ltd. 1982（桜井直文他訳『声の文化と文字の文化』（藤原書店、一九九一年）より考え方の手がかりを得ている。
- (95) 前掲、『米峰回顧談』一四七頁。
- (96) 同前一六六頁。既出の通り、友松圓諦の「法句経講義」も「原稿を讀まずにメモを片手に」（前掲、『世間虚假』一八〇頁）放送していた。一方、同じく放送の名手として有名だった永田青嵐は完全原稿を作つて読み上げるスタイルであった（永田秀次郎『青嵐』『放送懺悔』『実業之日本社、一九三七年』、八〜九頁）。
- (97) 高島米峰『放送寓感』『ラヂオの日本』九卷（社団法人日本ラヂオ協会発行、一九二九年）一六三頁。
- (98) 前掲、『高嶋米峰自叙伝』『追憶』一三九頁。
- (99) 同前『追憶』一五七頁。
- (100) 同前、本文二〇七頁。高嶋米峰は加藤咄堂を「弁論の雄」とし、境野黄洋を「一代の雄弁家」としている。
- (101) 前掲、『友松圓諦先生講話集』三六三頁。この「不立文字」の談話は、昭和九（一九三四）年六月一九日であったと記されている。時期としては真理運動本部の事務所開設の準備段階であった。
- (102) 同前三七一頁。
- (103) 同前三七〇頁。
- (104) 同前三九〇頁。
- (105) 同前三七八頁。
- (106) 同前三八二〜四頁。
- (107) 前掲、『法句経』の世界 生きているよろこび 友松圓諦（テープまたはCD）第四卷6「聞く」では、『法句経』第一五二番の「聞くこと少なきひととは、かの犁をひく牡牛のごとく、ただ老ゆるなり」を引いて、「聞く」ことの重要性を説いている。この時、ラヂオについて言及し、仏教において「聞く」ことが大切であることと、ラヂオが「聞く」メディアであることの連関を示唆している。放送は、ラヂオ日本（旧ラヂオ関東）「お早うアラム」で昭和四三（一九六八）年一月五日（同前の解説本五九頁）。
- (108) 江口克彦『成功の法則』（PHP研究所、一九九六年）九〇〜三頁。
- (109) 松下幸之助『経営心得帖』（PHP研究所、二〇〇一年）一八頁。
- (110) 松下幸之助・田川五郎『明日をひらく経営』（読売新聞社、一九

- 八二年) 四〇頁。
- (11) 前掲、『私の行き方考え方』五四頁。
- (112) 『速記録』三二七卷 (PH P総合研究所第一研究本部所蔵) 七五頁、前掲、『松下幸之助発言集』第一七卷一〇〇頁。共に、一九六二年の証言。幸之助はこれらの証言で、宗教放送を「つとめて」聞いていると述べているが、放送内容について強い不満を述べている。これは現状の放送に満足せずに、一段上の放送を求めて批判していたものと解釈できる。
- (113) 松下幸之助が、読書ではなくテレビやラジオから影響を受けていたことは、既に三鬼陽之助が指摘していた(三鬼陽之助「私の見た松下幸之助」『財界』新年特大号〔財界研究所、一九六六年〕一八頁)。
- (114) 例えば、『新仏教』一二卷三〇〇頁、一三卷一八七頁。
- (115) 高島米峰『宗教と人生』(帝國教育出版社、一九二九年) 一八頁。
- (116) 同前四一頁。
- (117) 前掲、『法句経』の世界 生きていくよろこび 友松圓諦「テープまたはCD」第一〇巻3「『無常』の世界はノンストップ」(昭和三九(一九六四)年浜松市における講演。解説本は二二二頁が該当しているが、この表現は圓諦の音声のみである)。
- (118) 『旧速記録』二〇・二二卷二四頁。
- (119) 『新仏教』第一五卷一五一頁。
- (120) 『法句経』の世界 生きていくよろこび 友松圓諦「テープまたはCD」第五卷8「精進」でも、休むことの重要性を述べている(前掲、「お早うアラム」昭和四三(一九六八)年九月二五日放送、解説本七一頁)。
- (121) 前掲、『松下幸之助発言集』第三〇卷一五〇頁。
- (122) 前掲、『松下幸之助発言集』第二七卷六七〇七七頁。
- (123) 前掲、『明治・大正期の新仏教運動と松下幸之助の思想』五五〇七頁。
- (124) 『旧速記録』二三卷一四一―二頁。
- (125) 前掲、『明治・大正期の新仏教運動と松下幸之助の思想』五五頁。他、高嶋米峰による井上円了に関する論述は、「井上円了先生を憶ふ」(前掲、『高嶋米峰氏大演説集』三二七―四八頁)、「護国愛理の権化井上円了先生」(前掲、『隨筆 人』三―三三頁)。
- (126) 例えば、池田大作との対談で、強い影響を受けた書物について聞かれて、「書物については、これまでほとんどそういうものを読んでおりませんので、とくにこれというような書物はございません」(前掲、『人生問答』上巻一三三頁)と言っている。ただし、子供のころは講談本を良く読んだと証言していることもある(前掲、『松下幸之助発言集』第一二卷一〇二頁など)。
- (127) 『世間虚假』四三頁。
- (128) 家族の体験談として代表的なものは、前掲、『母心』、『父心』である。
- (129) 前掲、『明治・大正期の新仏教運動と松下幸之助の思想』四六〇七頁。
- (130) 『新仏教』第一二卷九〇二頁。

- (131) 前掲、「明治・大正期の新仏教運動と松下幸之助の思想」三三三頁。
- (132) 友松圓諦訳『法句経』（講談社学術文庫、一九八五年）一二五頁。
- (133) 前掲、『法句経講義』八五頁。
- (134) 前掲、『PHPのことば』四〇四頁。
- (135) 前掲、『法句経』の世界 生きているよろこび 友松圓諦（テープまたはCD）第六巻7「得此生」では、「人の生をうくるはかたく」という思想が福田行誡にも由来し、さらに行誡が教えを受けた慧澄にも淵源がある旨を示唆している。前掲、「お早うアラム」昭和四三（一九六八）年一月四日放送（解説本八二頁）。
- (136) 前掲、『法句経講義』一五六頁。
- (137) 前掲、『法句経の世界』生きているよろこび 友松圓諦（テープまたはCD）第九巻7「こだわり無き心境」。この法話で、圓諦は『般若心経』の「狙い」は「すなおな心」であるとしている。放送は日経ラジオ社（旧日本短波放送）「朝の聖典講話」昭和三〇（一九五五）年八月七日（解説本一一六頁）。
- (138) 『旧速記録』三卷三三～四頁。
- (139) 松下幸之助「素直な心になるために」（PHP研究所、一九七六年）七五～八頁。
- (140) 前掲、『法句経講義』二八一頁。
- (141) 同前二七六頁。
- (142) 前掲、『松下幸之助発言集』第三二卷三八頁。
- (143) 同前『松下幸之助発言集』第二五卷一九頁。
- (144) 同前『松下幸之助発言集』第三〇卷二二～一頁。
- (145) 大内青巒に「道は近きにあり」（東亜堂書房、一九一五年）という書がある。高島米峰も、特に強調はしていないが、「道は邇に在り」と述べる時があった。『新仏教』第二二卷四二～二頁。
- (146) 『旧速記録』一三卷七～八頁。
- (147) 松下幸之助『その心意気やよし―増補改訂版』（PHP研究所、一九七一年）六九頁。
- (148) 『旧速記録』九卷五～六頁。
- (149) 友松圓諦の日記を調査した娘の山本幸世は、圓諦が軍国主義へ転回した時点を昭和一二（一九三七）年の一二月頃としている（前掲『友松圓諦日記抄』七六頁）。しかしこれは、山本による史料の読み違いであろう。本文で書いたように、日中戦争を全面的に肯定するようになるのは、同年の九月頃である。翌年一月号では、山本が言うように確かに「国民精神総動員の合い言葉によいしれる愚をいましめ」（『友松圓諦日記抄』同頁）ているが、これは一時的な拳国一致では不十分だと主張しているのであって、むしろ拳国一致を強く推奨している発言である。
- (150) 同前『友松圓諦日記抄』一三三頁。
- (151) 前掲、『世間虚假』一二四頁では、「大戦中には自分の生命がこわくて戦争の反対をいい通せなかった」としている。
- (152) 前掲、『法句経の世界』生きているよろこび 友松圓諦（テープまたはCD）第一巻1「春秋の彼岸は中道の思想」（昭和四四（一九六九）年三月二二日神田寺における講義、解説本一九頁）や第三巻7「中ということ」（前掲、「お早うアラム」昭和四三

〔一九六八〕年八月一九日放送、解説本五〇頁）などでも「中」の重視を説いている。

(153) 前掲、『不二の世界』一一〇～一二三頁。

(154) この時圓諦は「ラヂオ」とは言っていないが、「おひるのニュースを聞いてみると」と言っているのでラヂオのニュースであろう。

(155) 丸山真男『増補版現代政治の思想と行動』（未來社、一九六四年）

二四頁。丸山は、日本人が戦争へ向った「無責任の体系」（同前一二九頁）の原因を天皇制にあるとした。しかし、天皇制は古代から存在しているので、この時期にだけ集団ヒステリー的な社会現象が起きた第一の原因であるとは考えられない。一方、佐伯啓思は丸山の態度を「巧妙な自己特権化」（佐伯啓思『現代日本のリベラリズム』〔講談社、一九九六年〕一八九頁）として批判したが、これもラヂオと関係があるだろう。つまり、多くの大衆はラヂオ演説や音楽による思想的な「循環」に煽られ、集団的無責任体制のまま無計画な戦争を遂行したのではないか。丸山など一部の知識人はこうした「声の文化」や「音の文化」には染まらず、書籍を中心とする「文字の文化」でものごとを考えていたため、戦争後は「自己特権」的な立場で戦争責任を問うた。太平洋戦争の本質を集団的な無責任体制に求めるならば、第一原因はラヂオであり、それは日本放送協会が画策したものでなく、思想的「循環」によるものではないだろうか。

(156) 友松圓諦『仏教聖典』（講談社学術文庫、一九八一年）四頁、友松諦道による解説より。

(157) 「真理幼稚園」の語は、真理S一〇―一二―一四四に既に見えて  
いる。

※現在、戦前の雑誌『真理』は現存する数が非常に少ない。本稿の作成に当って、高野山大学図書館、大正大学図書館、佛教大学浄土宗文献室で特別に『真理』を閲覧、複写させて頂いた。また、友松圓諦の孫にあたる友松浩志氏からは、貴重な資料を頂くことができた。特記して感謝の意を表したい。

（さかもと・しんいち P H P 総合研究所第一研究本部松下理念研究部主任研究員）